

UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニューズレター

No. **71**

特集・アメリカ南米宇宙考古学の旅



ティティカカ湖上空のUFO!
●詳細は表紙裏の説明と旅行記を参照



〈巻頭言〉真相の隠蔽… 1

アリス・ウェルズ女史、逝去 フレッド・ステックリング… 2

「アメリカ南米宇宙考古学の旅」紀行

大アンデスと太陽の帝国へ 久保田八郎… 4

「アメリカ南米宇宙考古学の旅」を回想して… 23

〈写真〉幻想の南米… 26

質疑 宇宙と人間の真相(1) フレッド・ステックリング… 32
応答 スティーブ・ホワイトティング

日本GAP各地行事報告と予告… 36

今年度日本GAP総会予告… 37

第 3 回
〈予 告〉日本GAP アメリカ メキシコ 宇宙考古学の旅… 38
海外研修旅行 カリブ海

日本GAP全国月例研究会案内… 40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共禁無断転載。



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて「コズミック・パワー」の子であり、そのパワーの諸法則や宇宙に遍満している真実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発展をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。

■表紙写真は、今夏の「アメリカ南米宇宙考古学の旅」で8月20日、ペルー側ティティカカ湖畔のフリー船着場で休憩中、午前9時頃、山口緑氏（左端）、久保田八郎（中央）、武田充弘氏が湖をバックに立ち、山口氏がカメラを安藤澄雄氏に渡してシャッターを切ってもらったところ、湖の上空に円盤が写っていた（矢印）。左上は拡大写真。

去る九月九日に東京有楽町の朝日新聞社講堂において、米コーネル大学教授カール・サガン博士を招待した「宇宙と人類——コスモシンポジウム」が開催された。その第一部は「宇宙空間に知的生命はあるか」と題する討論会で、ステージの出席者はサガン博士を中心に東大教授二名、作家の小松左京氏、評論家の犬養智子氏、司会者の計六名である。聴講申込者は定員の百数十倍に達したという大変な前評判だったが、編者は幸いにしてSF作家である某氏宛の招待券を譲り受けて参加できた。

人も知るサガン博士は（正しくはセーガンというらしい）火星に軟着陸したNASAのバイキング計画を初めポイジャー、パイオニア計画の中心人物であり、大気圏外生命肯定論者のようなので、多大の関心をもって聴いたが、結果は期待外れだった。全くあたりさわりのない話に終始し、この太陽系内の各惑星の人類存在を否定したばかりか、犬養氏のUFOに関する質問に対しても打ち消しの態度に出たあげく、最後には「もし高度に知的な大気圏外人類が存在して我々のシンポジウムを聴いていたとすれば、彼らは地球にもこんなエライ人間がいるのかと驚くだろう」というジョークで聴衆を笑わせていた。

失望の極に達した編者は第一部だけで早々と会場を出て有楽町駅に向かった。あれほどの知識人でもUFOの謎に向ける眼を持たぬのか——。

駅のホームに立って電車を待っていたとき、突如、あるフィードバックが湧き起

こつてきた。

「サガン博士は隠していたのだ！」

考えてみればUFO問題や太陽系の各惑星の真相を知り抜いている筈の博士が他国の民間会社主催のシンポジウムで、アメリカの運命を左右しかねない重大問題を軽率に洩らすわけがない。出席したメンバーや聴衆を適当にあしらい、無難な発言で時間を費やして、「ま、お互いに未来に向かって前進しましょう」というようなジャンジャン大会で終了せしめるほうがサガン博士個人のみならずアメリカにとっても有利なのである。

なぜか？ この緊張激烈な時期にアメ

<巻頭言>

真相の隠蔽



リカ政府が突然UFO問題の真相を公開し、「太陽系内の地球以外の惑星には偉大な人類が存在して、ひそかに地球の救援活動を行っている」などと、間の抜けた「表明をしようものなら、ソ連から猛烈な攻撃を受けるだろう。アメリカは謀略により西側世界のためのでっちあげ宣伝をやっている」と。一方、ソ連がUFOや大気圏外人類存在の事実を公開すれば、アメリカの対ソ非難が展開するにきまっている。「ソ連にだまされるな。共產主義者の宣伝だ！」

両大国が一致団結して別惑星の人類存在説を唱えたらどうなるか。それこそ世

界は蜂の巣をつついたような大騒ぎになる。価値観の大転換、経済界の大変動、学界の権威の失墜、教科書の全面書き換え等、測り知れぬ大混乱が発生することは眼に見えている。

また「自分よりも偉い宇宙人」が出現すれば大衆を救う筈の宗教団体の教祖は真ッ青になり、宗教界は壊滅する。これでは大衆を歓喜させるどころか恐怖を植えつけるだけだ。

一体に、大衆を愚弄し、権力の拡大のために手段を選ばぬ政治屋の暴走を防ぐ目的で、政府部内にはある秘密機関または特定の人物が極秘事項を掌握している場合が多い。落選するか政敵にやられていつ姿を消すかわからぬ政治屋の集団は案外に政府の機密を知らぬのである。

先般九月二十日付の読売新聞によるとアメリカが極秘のイラン文書を作成していたことをワシントンポスト紙が暴露したという。米國務省のイラン研究グループが過去四十年間にわたるアメリカとイランの関係について極秘資料や記録を綜合したイランペーパー（イラン文書）と呼ばれる約六万頁のこの秘密文書は二部しかなく、一部はブレジンスキー大統領補佐官の手にあり、他の一部は國務省高官二人しかその所在を知らないところに保存してある、と報道していた。

これは氷山の一角だろう。一国家が膨大な秘密をかかえていることは当然だ。これをすべて白日のもとに晒せば大変な事態を招く。したがってひと握りのトップクラス高官や御用学者だけが真相を把握するシステムが用いられるのである。

かつて金星探査機が金星に軟着陸して撮影した地表の写真が公開された。セ氏三百数十度、亜鉛板を溶かすといわれる焦熱地獄の筈の金星表面は、写真で見ると限り科学者が想像したような熱気流の渦巻もなく、地球によく似ているように思われたが、それよりもパラシュートをつけた探査機が平穩無事に軟着陸して写真を送した事実が奇妙であった。どうみても金星に関しては重大な秘密が隠されているとしか思えない。

「金星には人間の住める大気と温暖な氣候が存在することがわかった」

これはむかし最初の金星ロケットが到着してデータを送り返した直後に全米科学促進協会の重鎮が語った言葉だが、まもなく科学者や政府高官に打ち消されていつのまにかセ氏数百度の高温ということになり、一般大衆は信じきってしまった。

この金星の高温についてはシンポジウムでサガン博士も言及し、それゆえに人間は住めないのだと結論づけたのだが、想起すればそのとき一流科学者らしからぬ態度が見られたような気がした。ニタニタと薄笑いを浮かべながら言葉を選ぶかのように慎重に語るサガン博士の顔に浮かんでいたものは何か——。

「何も知らぬ一般大衆の前で、国家的な極秘問題が簡単に言えるものか！」

タイム誌の「明日のアメリカを担う二百人」の一人に選ばれるほどの超一流の科学者は、やはり賢明そのものであり、アメリカのみならず世界の存亡の一端を担っていると言えぬのだろうか。

アリス・ウェルズ女史, 逝去

ジョージ・アダムスキー財団理事

フレッド・ステックリング



一九七五年十月末のアリス・ウェルズ夫人と編者(久保田)

八月二十六日午後十一時四十分、ジョージ・アダムスキーの門下生でアダムスキー財団理事長であるアリス・K・ウェルズ夫人が逝去されました。行年八十歳です。遺言により遺体は火葬に付されて灰は海に撒かれました。彼女は伝統的な葬式の価値を認めず、友情、尊敬、賞讃などは死後でなく在世中に寄せられるべきだと考えていました。

こちらジョージ・アダムスキー財団では変動はなく、ステイプ・ハワイティング氏と私が財団の理事として故ジョ

ージ・アダムスキーの仕事を継続します。ウェルズ夫人の逝去は私たちや、最近数カ月間に来られた多数の訪問者にとつて驚くべき事ではありません。なぜなら彼女は、生命の表現の新しい径路を引き継ぐために、この古い老体を残すべき時機が来たと言言していたからです。

ウェルズ夫人は宇宙哲学の研究と奉仕に対して、成長後の人生の大半を捧げてきました。ジョージ・アダムスキーに從つて多年学んできた宇宙哲学に対する信奉は、他界するまで持続していました。私たちすべてが現在までに知るようになったその哲学を思い起こすためにジョージ・アダムスキー著「宇宙船の内部」から次の箇所を引用しましょう。

「死」は地球と同様に他の惑星群にもありますが、私たちはそれを死とは言わないし、また地球人のように死者を悲しむこともしません。私たちはこの離別が一つの状態または場所から別な状態または場所への変化を意味するにすぎないことを知っています。

私たちはある場所から別な場所へ行くときに自分の家を持つて行くことはできません。これと同様に、死んだときもある世界から別な世界へ、家である肉体を持って行くこともできません。地球人の肉体を構成する材料は地球のものですが、その世界を維持するためにそこへ残さねばなりません。一方、地球から別な惑星へ移動する場合は、その世界がそこに存在する必要物や状態に応じて家を建てるための材料を提供してくれれます。

宇宙に関する地球人の概念は実に貧弱

なものです。彼らは無限の宇宙を想像できないのに、永遠という言葉を使用します。人間自身の定義によれば、永遠とは初めも終わりもないことを意味します。そうすると宇宙はどんなに広大なのでしょうか？ 永遠と同様に広大なのです。したがって人間は一時的な現れではなく、この真理を体得している私たちは不変の現在の中に生きています。真理そのものは常に現在であるからです」

(久保田八郎訳)

ウェルズ夫人の思い出

久保田八郎

私が初めてウェルズ夫人にお会いしたのは一九七五年の十月末から十一月初旬にかけて最初のビスタ訪問を行ったときだった。この詳細な様子については本誌第57号から連載した旅行記の第一部「きらめくビスタの星」に述べたが、あのときの光景は昨日の事のように鮮明に浮かんでくる。

白い服に白いバンタロンをはき、杖をついた夫人は、不自由な体にもかかわらず二日間元氣よく語ってくれた。このときに聞いたアダムスキーに関する秘話などからア氏の宇宙的体験なるものが決定的に事実であると確信したのである。

一九〇〇年生まれ夫人は、ハリウッド高校を一九一八年(大正七年)に卒業して南カリフォルニア大学の研究科に入學し、二年後に終了した。やがて結婚し

たけれども、何かの理由で数年後に離婚した。アダムスキーのもとに入門してから夫君と別れたのか、その前に離婚していたのかは不明だが、弟子になってから四十年以上も奉仕したというから、三十七歳の初期に入門したらしい。離婚後も「Mrs」を用いたために私たちは夫と呼ぶが、実際は独身である。

彼女はロサンゼルス近郊のグレンデールにあったウェルズ農場の富裕な家族に生まれた。しかし三〇年代の大不況で経営者の祖父が大打撃を蒙ったため、農場で彼女は旅行者用のレストラン兼インを経営した。この経験が後にアダムスキー一族と共にパロマー山のパロマーガーデンスでレストランを再度経営したときに役立ったのである。

ア氏は戦前ラグナビーチに長く居住して、一大グループを形成し、宇宙的な哲学を教えていた。ロイヤル・オーダー・オブ・ティベットという団体名を用いたが、このためコンタクト事件で有名になってから宗教団体または神秘主義グループと勘違いされて攻撃的になった。この当時にア氏が出した古い質疑応答書は私は所有しているが、その内容はすでに堂々たる宇宙哲学そのものであり、宗教とは全く無縁である。

ラグナビーチ居住時代、ア氏はすでに天体観測に異常な関心を持っていたので後年パロマー天文台で研究したカリフォルニア工科大学の天文学教授、ジョーゼフ・ジョンソン博士の母堂がア氏の弟子であったところから、この母堂がア氏に六インチ反射望遠鏡を贈ったのである。

ジョンソン博士もア氏と親友で、パロマー山麓のバレーセンターに移住していたア氏にむかって山腹の台地に旅行者用の休憩所を作らないかと誘いかけたため、インディアンが所有していた広い土地のうち二十一エーカーを買収してそこをパロマーガーデンスと名付け、ここでアリス・ウェルズ夫人は一族の資金源としてレストランを経営した。これが現在キャンブルグラウンドとして残っている場所で、レストラン跡はコンクリートで敷地のみが固められ、そのすぐ奥にアダムスキーが自ら建てた木小屋が記念物として保存されていることは大方の読者がご存知のとおりである。それで日本GAPは毎夏、団体旅行でここを訪れるのだ。

このパロマーガーデンスに移住した年月は私の資料を調べれば判明するはずである。私がア氏と最初の文通を開始した頃は、ア氏の住所はまだバレーセンターとなっていた。

ちなみに、私はむかしアダムスキーと多年にわたり文通したが、彼から来た膨大な書簡類は全部秘蔵しているし、私が彼宛に出した手紙のコピーも全部保存してある。その大部分は「空飛ぶ円盤とアダムスキー」と題する書物の中で公開したけれども、公開しない書簡もある。そして往時を回想すると、アダムスキーが如何に偉大な人物であったかを改めて痛感するのである。

さて、このパロマーガーデンス時代、最初の体験記を発表してからアダムスキーは世界的に有名になったが、一方、猛

烈な攻撃も受けた。アメリカやイギリスで出たひどい書物になると、アダムスキーはレストランのコックをやっている無学な男で、屋根の上に望遠鏡を取り付けて星をのぞいていたと書いたものもあるし、ハンバーグを売る商人だと書きとばしたのもあったことを覚えている。しかも当時、日本の反アダムスキー派のUFO研究者までが、こんなインチキ書物の内容を真に受けて攻撃していた。UFO研究界のデータメスは洋の東西を問わない。

こうした「激動」の時代を山中ですごし、甲斐々々しくレストランを経営していたウェルズ夫人は、ア氏に関する歴史の生き証人であった。老齢にもかかわらず、少しカン高い、快活な声で過去を語る夫人は、私との長時間の対話で決して愚痴をこぼさなかったし、他人の悪口も言わなかった。もちろん、それは私の文筆を通じて一般に洩れることを考慮した賢明さのしからしむるところだろうが、回想するのが楽しくてしょうがないという風情にも見えた。一人の偉大な男に奉仕をし、精一杯の努力をして、なすべき事をなしたという悟りきった高貴な婦人の姿である。

以来五カ年が矢のように流れて、気がついたら彼女は病床にあった。今夏ビスタに滞在中、六月十九日に二度目の見舞に行つたとき、憔悴しきった様子に胸が熱くなり、その姿が涙でぼやけたのを思い出す。この感傷は東洋的というよりも地球的なものかもしれないが、ビスタのGAP本部の人たちは全く平然とし、彼

女の転生が近づいたことをむしろ祝うべきだと強調していた。一般人から見れば正気の沙汰ではあるまいが、宇宙哲学により転生の法則を知る私たちは「愛する人との訣れ」に際し、絶対に悲痛な感情を起こしてはならないし、また起こす必要もないのである。

人間は死後数秒間でその実体は別な肉体に移行する。具体的に言うと、息が絶えて二・三秒後に、本人の「意識」は、遠く離れた一妊婦の腹からまさに生まれ出ようとする胎児の肉体内に移行するのである。肉体細胞を持たずして思考エネルギーを発生させることは不可能であり、したがって肉体は連続するのであって、心霊家が言うように死後靈魂が霊界で当分の間休息するとか、その霊界から高級霊が、頼みもしないのに下界の人間にとりついて守護霊になるというが如き説はすべて真実ではないとアダムスキーは説いている。いうまでもなくこの知識はスペース・ブラザーズからもたらされたもので、地球人未知のインフォメーションである。人間の実体に関する限り、地球人の理解力は原始人のシャーマニックな神秘思想の域を一步も出ないという現状らしい。

それはともかく、ウェルズ夫人自身は死期が近づくとつれて転生を渴望し、一刻も早く良き健康な肉体を得ることを願っていた。高度な惑星に移動したのか地球にとどまったかは不明であるが、美しい新生児として新しい生涯を開始したにちがいない。いまは微笑して幸あれと祈る次第である。

大アンデスと太陽の帝国へ

●久保田 八郎



●ペルー、マチュピチュの遺跡

去る八月十四日より二十六日まで日本GAPは一九七八年に引き続き第二回海外研修旅行として「アメリカ南米宇宙考古学の旅」を実施したが、六十三名にのぼる大旅行団はアメリカのカリフォルニア州を皮切りに南米ペルーとボリビアの千古の謎に包まれた遺跡を見学して長途の大旅行を終え、全員無事に帰国した。

たがるので装備も大変である。衣類の夏物と冬物を詰め込んだ荷物はスツーカーと手荷物とで四個になったけれども、手荷物三個は強引に機内に持ち込んだ。シヨルダーバッグ、スポーツバッグ、それに大きな手提袋の三つを一人で運搬するのは困難だったが、幸いにも旅行中数名の方々が交替で運んで下さったので大助かりだった。親切さというのは永遠をたらぬく宇宙の法則の一つであろう。

特にデザートセンターとティティカカ湖上空にUFOが出現するという素晴らしいおまけまでついて関係者一同は歓喜した。

宇宙的な音楽とは
日航のジャンボ機64便は定刻を十分間遅れて午後三時に離陸した。この程度の遅れなら正確なほうである。添乗員の田中氏によると、世界のあらゆる航空会社で日航ほどに厳正で、しっかりした航空会社はないという。この点からみても日本人は優秀な民族だと言えるのだから、必ずしもそう思えぬフシもあるのが、大和民族についていろいろ考えてみるのに、どうも結論が出ない。

参加者各位と、お世話になった提携旅行社ワールドセブントラベルの田中正氏に衷心よりお礼を申し上げる次第である。

ま、むつかしく考えるのはよそう。旅はできるだけ楽しくやるべきだ。右隣の小坂恵さんや左隣の田中氏と語り合っているうちに機は夜間飛行に入った。

以下は二週間にわたる日程を平易に綴った手記である。

これまでの経験からして、旅客機の夜間飛行中は、かなり機内が冷えるので、そのつもりで衣類を携行するようにと皆さんに呼びかけていたのだけれども、この日航ジャンボ機は冷え込まない。暖かくてシャツ一枚で充分である。ここでも

八月十四日正午、成田空港に集結した一行は、まず空港北ウィングのロビーで結団式を挙行後、全員記念撮影を行った。昨年の旅行では都合により二組のグループに分かれて一日違いで出発したが、今回は全員一緒の出発だから実に賑かである。

結団式で最後の挨拶を行った私は、まとも団長としての重責がのしかかるのを感じながら、見送りの人たちと別れを告げて、一同と共にバスポートコントロールへ降りて行った。

今度の旅行は真夏のカリフォルニアと真冬の南米ペルー、ボリビアの両方にま

気がする。



●成田空港北ウィングにて。
出発前の勢揃い。

退屈になったので、バッグからアイワのステレオカセットポイを取り出してテープでマラーの交響曲三番を聴く(、バインスタイン指揮、ニューヨークフィル)。ポケットに入るような小さなレコからステレオで深遠雄大な曲がヘッドホンを通じて大音響で鳴り響いてくると、文明もここまで進歩したのかと驚嘆のほかない。

アダムスキーによると、地球の科学技術の進歩は太陽系中であなどりがたいものがあるのに、精神の発達がいち早く遅れて、ひどいアンバランスな状態にあるのだという。そのために地球は最下位にとどまっているのである。

それにしても何度聴いたかしねマラーの三番を、こうして旅路の機内で耳にすると感動もひとしおで、特にホルンの独奏部と最終楽章などはまさに宇宙的としか言いようがなく、全身が歓喜で躍動する。私の耳の細胞は音楽に対して異常なまでに高感度であるにちがいない。今回の南米行きも、神秘の遺跡群もさることながら、ラテンアメリカの民族音楽に陶醉しようという私なりの目論見があった。

ちなみに、宇宙的な音楽とはどのような曲を指すかという問題で、むかし私の西洋音楽史の先生だった高名な音楽評論家のM先生に今春お尋ねしたら、即座にバッハの「ゴルトベルク変奏曲」というお答があり、「ついでにもう一つ挙げればブルックナーの交響曲三番だろう」ということだった。このご意見は意外だったので、あらためてアメリカGAP本

部のステックリング氏に書簡で質問したところ、ヨハン・シュトラウスのワルツ曲が宇宙的な音楽の典型的なものだと回答してきた。シュトラウスは金星から地球へ転生して当時の荒廃したヨーロッパの人心を高揚させた後、また金星へ転生して帰って行ったのだという。また、宇宙的な音楽とは一定の作曲家の作品に限らず、自分の魂を昇華させるような曲ならばどれでもよいともいうし、最高に宇宙的な音楽は、風の音、川のせせらぎ、鳥や虫の声などの自然界の音響だという。この問題もむつかしく考える必要はあるまい。

なつかしのカリフォルニアへ

翌十四日、八時二十分にロサンジェルス空港へ無事着陸した。アメリカは日本よりも日付が一日遅れるので、この日も十四日であるが、実際は約九時間の飛行後であるから、日本ならば十四日の深夜である。

この日ロサンジェルスはどんよりとした曇り空で、どうもパツとしない。昨夏もカリフォルニア一帯は暗雲に覆われてついにパロマ山はひどい霧に包まれるという悪条件だったために「今年もか」と一瞬絶望感におそわれたが、しかしまもなくこれは加州特有の「朝曇りは大日のもと」現象であることがわかって安心した。

ただちにバス二台に分乗してフリーウェイを南下する。私は先月カリフォルニアに滞在したばかりで、再度の来訪であ

るから、故郷へ帰ったような気がして嬉しくてしようがない。私にとってはこのところ日本よりも加州のほうが重要な場所になってきたのである。

大洪水のごとき車の流れを見ながら現在在の日本人ガイド氏が説明する。アメリカの車には車検がない。走れさえすればよいのだ。運転免許証も十六歳から三ドル五十セントの費用で取れる、というよりも買えるのである。だから運転技術は平均してあまりよくない、云々。いかにもお粗末にみえるが、実際は小学校から社会科などで運転者のマナーに関して教育を施しているのである。先号にも述べたように、自動車を下駄がわりに用いる国だから、あまりうるさい規制をしていては生活に支障をきたすのだ。

空は次第に晴れて、絶好のカリフォルニア日和となってきた。太陽の大地だから快晴にならないと加州らしくない。

こぎれいな民家があとへ流れる。いずれも平屋だが、これは地震を警戒するためである。屋外に洗濯物を干している家は皆無といってよいほど見あたらない。私の持論の一つに「程度の低い人種ほど他人の眼につく場所へ下着類の洗濯物を平気でつり下げる」というのが、ある。「ナポリノ旗」といわれるイタリア、ナポリの貧民街のすさまじい洗濯物を思い出しながら、自分の国をも想起しないわけにはゆかなかった。

一時三十分頃、海岸ぞいのレスト・エリア(休憩所)に立ち寄って暫時休憩し車内で弁当をとる。風景がよいせいか、皆さん方が散ってしまい、集合が遅れて

四十分も時間のロスが出たので、集合時刻の厳守の励みを痛感し、今後はきびしい指令を発する憎まれ役を買って出ようとした。しかし、これは結果的によかつた。以後、アメリカでも南米でも、わが旅行団は時間をよく守る、まれにみる優秀な団体として現地在住の日本人ガイドさん方から絶賛をあびるに至ったのである。

さてバスは見慣れたパロマー山麓から山頂を目指して進行する。空は晴れて日差しが暑く、昨年とは打って変わって素晴らしい天気だ。今回でパロマー天文台参観四度目という私は、日本人として見学最多記録ではあるまいかとひそかにプライドを持しながら周囲の風景を見渡した。舗装された登山道を、バスが登るにつれて緑豊かな森林地帯が展開する。

清澄なパロマー山へ登る

やがてバスは「キャンプグラウンド」と書かれた小さな門の前にさしかかった。「ここで停車」

私は運転士に叫んで飛び降りた。この地はかつてアダムスキーが住んでいたパロマーガーデンズの跡である。

先頭に立って敷地内の左奥へ行くと、ゆるやかな坂の上にコンクリートの敷地とア氏が建てた物置小屋が残っている。昨夏来たときは小屋の下方の板壁の一部が破損していたので、帰国後ステックリング氏に手紙を出し、至急修理して、ア氏の遺跡であることを明示した掲示板を立てたらどうかと提言したところ、現

在これらの遺跡は他人の所有物なので自分たちの手ではどうにもならないのだと返事をよこした。つまり敷地の所有者がアダムスキーを記念してこの遺跡を保存しているのである。

ア氏が愛したという檜の大木数本は昔のまま、帰らぬ主人を待っているかのようだ。木の葉から陽光が洩れ、鳥の美

●パロマーガーデンズにて。右後方にア氏が建てた木小屋が見える



しいさえずりが響いてくる。五年前に私が初めて訪れたときと様子は全く変わらない。

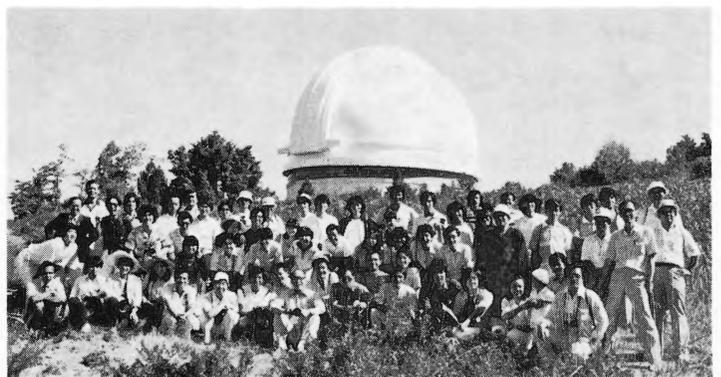
しかし見逃せない事実が一つある。アダムスキーが住んでいた五〇年代は、ここはなんの設備もない未開地であった。現在は数軒の家があり、水泳用プールまで設置してあるが、当時は何もない野原で、すべて自給自足の生活であった。こんな辺鄙な山奥にア氏が多年住んだこと自体、彼がいかに俗世界を離れて大自然との一体化を図ろうとしたかの証拠である。常人のまねのできない生活をみずから実践していたのだ。

私は皆さんに簡単に説明し、次に全員記念写真を撮影後、一時解散してあたりを散策した。大勢の白人の子供たちが驚いたような顔をして一同を見つめていた。今回の旅行団の大半の方はおとなしい人ばかりなので、皆さん方は感動しているのかどうかはわからぬが、私には何度来ても低徊去るあたわざる重要な場所である。

やがて一同はバスの方へ引き返した。これから更に山頂の天文台へ向かうのである。進行すること約三十分、標高二千百メートルの山頂駐車場へ到着した。時間が無いので博物館は抜きにして、小道を急ぎ、途中、白亜の大ドームをバックに全員を撮影する。澄み切った紺碧の空に高さ六十メートルの真っ白いドームが鮮やかに浮き上がっている。

「綺麗だなあ！」
感嘆の声があちこちであがる。昨年は深い霧のために、そばへ来てもこの巨大

●パロマー天文台をバックに



なドームが識別できなかったほどだから今回はツイていた。というよりも、これが普通なのであって、昨年は運が悪かったのである。

ドーム内に入り、二百インチの大望遠鏡のメカニズムについて私は説明した。極軸を望遠鏡と勘違いする人が多いようなので、その点を解説する。むかし望遠鏡製作狂だった私が、日本人がめつたに出来ないこの大天文台を何度も見学すると

7

いのも何か因縁めいているようだ。
このパロマー天文台は長く世界一の座を保ち続けたけれども、先年ソ連が少し大きな望遠鏡を製作したために追い抜かれて、今は世界第二位となった。しかし多年、天文学界に図り知れぬ貢献をなしている。アダムスキーは在世の頃、この職員であったジョンソン博士やその他の科学者と親交があった。ア氏が円盤や母船等を撮影するのに用いた六インチ反射望遠鏡は、ジョンソン博士の母君がア氏に贈った物である。

四時四十五分に一行はバスで山頂を出発して下山の途についた。ドーム内に入ったとき、今晚の日米GAP合同夕食会場がファウンティン・レストランからチョッピング・ブロックス・デイナーに変更になったと田中氏から聞かされ、しかもそのことを現地旅行社のガイドさんが今初めて洩らしたと言われるので啞然としたが、ともかくドーム内の電話から至急にその旨をステックリング氏宅へ連絡してもらった。パーティー開始時間も七時を八時に変更した。

下山してからビスタ市内へ入り、ラド・デ・ロマ・ドライブにあるジョージ・アダムスキー財団を訪問の予定だったがアリス・ウェルズ夫人が重態のため、内部へ入るのは遠慮してくれというス氏の事前の要請を承諾して、私たちは宿舎のヒルトップ・モーターへ直行し、チェックインした。六時半頃である。七時四十五分にバスで出発となっているので、それまでの約一時間余り、超特急で洗濯、アイロンかけ、入浴をすませ、白のスー

ツに白シャツ、白靴、濃紺の蝶ネクタイといういでたちで出かけた。皆さん方もフォーマルな衣服に着換えたため、美しく、きらびやかな雰囲気が生じた。服装の重要さをあらためて痛感する。

八時前にチョッピングへ到着して中の大広間へ入ると、まもなく、ステックリング氏、ホワイティング氏、その他、アメリカGAP本部の方々が姿を現した。私はつい先日別れたばかりだから、簡単にやあやあと挨拶を交わして席に着いた。スーツやネクタイを嫌う開放的なこの人たちも、私の依頼により今日はきちんとした格好で来ている。先方の出席者はス氏、ホ氏、イングリッド夫人、グレン君、エリシアちゃん、ハンソン夫人、セルチャウ康子さん、チャップマン氏の八名で、財団のマーサさんはアリスさんの看病で来られず康子さんのご主人のセルチャウ氏も仕事で出席不可能だった。

八時すぎにまず私が正面に出て英語で開会の挨拶を行い、それを副団長の志田氏が日本語に翻訳された。その内容は次のとおりである。

「皆様、今晚は。本日ここビスタでI GAP本部の素晴らしい人たちと共に過ごすことが出来ますことは我々にとって大変光栄であり、また喜びであります。ご存知の如く、アメリカ合衆国は日本にとって最も力強い友好国であり、また米GAPは世界で最も宇宙的な組織の一つであります。ここビスタは故アダムスキー氏が四年前をすごした大変美しい町です。もつと

も彼の真のホームは地球上の小さな場所ではなく、限らない宇宙でした。

我々は彼が現在どこに住んでいるか知りませんが、遠く離れた他の惑星か、あるいは他の太陽系から我々をあたたく見守ってくれていると確信致します。

加うるに、米GAPの皆様は創造主のために素晴らしい仕事をなさっておられます。この方々は我々にとって、宇宙の法則とア氏の教えに関する唯一の指導者であります。

再度申しますと、今晚こうして皆様とすごせますことは実に幸福なことであります。

(志田真人訳)

どうもありがとうございます。

続いて私は乾杯の音頭をとった。
「アダムスキー財団と日本GAPの今後の一層の発展を祈念し、スペースブルー及び宇宙の創造主に対し限りない感謝をこめて乾杯します。(同氏訳)」

ここまでは英語で行い、そのあとは日本語で「かんばーい！」と大音声で叫んだ。全員の大歓声による唱和が室内に轟きわたり、引き続いて一斉に拍手が起こる。

いかにも日本的なやり方だが、どうせ外国でのパーティーだ。思いきり景気よくやるほうがよい。

このあとス氏は正面に案内して記念品の贈呈を行った。参加者の一人、藤井洋君が寄贈したニコン双眼鏡(7×50mm)である。私は自席へもどり、や々とス氏

やホ氏らと話を交わすことができた。

「日本人はひどく儀式的なのですね」

私が弁解すると、彼らは笑ってうなずいた。ここまでこぎつけるのに気苦労の連続であった私は空腹感が起こらぬのでやたらと水割りを飲み続けて、彼らにもすすめた。

約三十分後に今度はス氏のスピーチが始まった。通訳は志田氏である。

「日本GAPの皆様。故アダムスキー氏の最後の生活の場となった、ここカリフォルニアのビスタによるこそおいで下さいました。

アダムスキー氏はここで生活しましたが、彼は宇宙的な人であり、宇宙の指導者であり、彼の真のホームは無限の宇宙そのものでした。

ア氏は生存中、我々が見たり触れたりしているもの、あるいは人間の肉体や、我々が住んでいる、または住んだことのある多くの惑星すらも、いかなるものも我々の所有物ではないという事実を、多くの人たちに理解せしめようと努力しました。

すべてのものは、それらを存在せしめた生命の創造力から生み出されたものです。また、すべての物は、やがて新しい物が我々の必要を満たすために我々を待ち受けている所に置き去られていかなばなりません。

もし人間がこうした物の所有を主張しますと、生命の創造主や宇宙の法則から分離して生活することになります。

今日人間を悩ませている地球上でのあ

あらゆる災難は、所有欲、貪欲、恐怖、攻撃性などが原因となって発生してきたもので、事実、それらはずっとあらゆる災難の要因となっていました。

こうした災難は、創造主の法則や活動とは何ら関係なく、ただただ人間のエゴイステティックな行動の産物なのです。

人間は肉体と心を通じて表現される意識そのものです。これら三つの力の調和は、本当の幸福や生命の真の目的に到達するための重要な要素です。

愛の普遍的原理は、生命の普遍的原理の最も偉大なものの一つでありながら、(一般的に)ひどく誤解されています。

真に宇宙的な愛とは、動物、植物及び人間など、生命のあらゆる形のあいだに存在するあたたかい統一的なフィージングです。

人間が真に宇宙的になろうとするなら自分たちのまわりに存在するあらゆる生命を調和、統合させる真の愛の原理の利用法を学ぶ必要があります。宇宙的もしくは普遍的な意味において、英知なき知識というのは、ほとんど価値がありません。それどころか、ときとしては全く知識がないことより悪いことになりかねません。

今晚皆さんと一緒に食事をしますと、イエスがかつて述べたように、口の中で食べ物はどうなっていくかが問題ではなく、そのときの人間の状態によって、より大きな影響を受け、どのような結果になるかが問題なのです。

人間は自分の思ったとおりになるので自然が消化や、肉体を維持するのに必要

な食物のエッセンスを抽出するのを妨げないように、食事中は我々の想念を均衡と調和の状態に保つ必要があります。怒り、心配、恐怖、憎悪などの極端な感情は、平常の消化を妨げるばかりでなくときとしては病気にいたらしめます。健康の維持や心の平静さというのは人間自身の手ゆだねられていることを忘れて下さい。

これらの簡単な、しかし大変重要な法則を認識しながら生活することは、ア氏が著書や講義の中でずっと強調してきたことです。

次に、こうした法則をある程度理解している人々は、オープンな気持で耳をかたむけようとする人々に教えずにはなりません。

しかし最も重要なことは、我々自身が日常生活の中で宇宙的な生き方をしなくてはならないということです。でなければ無意味です。

さて、皆様方がカリフォルニアで楽しくすごされ、これからの南米旅行が皆様にあって報いのある有益な旅となるよう願ってやみません。

どうも有難うございました。

(志田真人訳)

このあと首藤秀利君(大分市)が羽織袴姿で尺八の演奏を行い、喝采をあげたが、あとはどうもバツとせず、皆さんはあまりに黙り込んでいたので、私は少なからずヤキモキした。こうした国際的なパーティーではテーブルに座っている隣の人たちと積極的に語り合わなくては

●日米GAP合同夕食会。前列向かって右よりヤスコ・セルチャウさん、田中氏、ホワイティング氏、久保田、ステックリング氏、同イングリッド夫人、令嬢エリシアちゃん、令息グレンさん、ハンソン夫人、チャップマン氏。(ショッピング・ボックス・ディナーにて)



けない。黙っているのは招待者に対して失礼になるのである。

私はここでそのことを力説しなかったけれどもここは説教の場ではないので、とにかくシラケムードを開放しようと躍起になり、事前の打ち合わせが徹底しなかったことを大いに後悔した。

アメリカGAP側は敏感に私の気持ちを察したらしく、もういいから質疑応答をやろうではないかと提案してきた。それだそれだとばかり同意して、ただちに開始した。残り少ない時間なので質問は少数にとどまったけれども、これで救われたのである。

最後に私が閉会の辞を述べて夕食会は終了した。皆さん方は感動のあまり静粛であったのだといえるのかもしれない。

宿舎へ帰ってから、パーティーが無事終了したので、祝いに遊びに行こうではないかと若林明(川口市)、斎藤泰文(東京)、藤井洋(東京)、小林智利(群馬県)、大山耕一(三重県)の諸君に誘いかけたところ快諾を得たので、タクシーをよとい、ビスタ市内のバーへ案内させた。何という名の店か忘れたが、この店主は非常に親切な人で我々日本人を心から歓迎し、また居合わせた数名のアメリカ人のお客さん方もきわめて友好的につき合ってくれて深更二時まで愉快に歓談しながらすごしたのであった。客の一人は最後に車でわざわざヒルトップモーターまで全員を送ってくれた。

アメリカでは飲屋から出て車を運転しても違反にはならない。事故を起こさなければよいのである。交通規則でがんじ

がらめに縛られている日本に比べれば、まことにおらかな話だ。このバーの例を皮切りに以後アメリカ人が日本人に対して想像以上に友好的であることを次第に感じてきたのである。

デザートセンターで母船が出現!

十五日。今日はデザートセンター行きのため、早朝五時にモーニングコールがかかったが、私は二時すぎに帰って熟睡してから三時間しか経過していないので心配した若林君がサルマタひとつの裸体で助けにやって来た。部屋中に散らばった品を急速に手際よくまとめて荷作りしてくれることはわかっているのだが、どうにも意識がはつきりしない。

七時から全員で町の中心部のキャロウズというレストランへ入って朝食をとる。この店は私が先般研修旅行でビスタに滞在中、毎日食事に来た場所だからなつかしい。ここで熱いコーヒを飲んでいるうちにやっとな覚醒感がわいてきた。

八時三十分頃にバスでデザートセンター目指して出発する。私はステックリング氏が運転する車に同乗して、バスのあとに従った。皆さんはバスの中でよく眠ったらしいが、今度は私が眠れない。コーヒのせいだろうか。車中、ス氏が面白い話をしてくれる。だがそれらは左の耳から右の耳へ筒抜けに通過して記憶に残らない。なぜバスの前に出て先導しないのかと尋ねたら、バスの運転手はプロだから、それに敬意を表しているのだと氏は答えた。これは立派な態度である。しか

し地理不案内のバス運転手はコースを間違えて、とんでもない回り道をしてしまった。こんな道路を通るのは初めてだとス氏が語る。

デザートセンターに着いたのは昼過ぎである。曇天の昨年とは打って変わって一点の雲もない快晴で、外へ出ると、ものすごく暑い。携行した温度計で計ってみるとセ氏四十度ある。コンタクト地点まで約一キロの砂漠を一同ぞろぞろと歩いて行く。私の重いカメラバッグは若林君やその他の方がかついで下さったので大助かりだ。全くこの方々のご厚意には頭が上がらない。毛髪の少ない私の頭が強烈な直射日光にやられることを心配した藤井洋君が、持参したコウモリ傘を貸して下さったが、これも大きな防壁となった。げに親切さほど高貴なものはないのだと天空に向かって叫びたくなる。

コンタクト地点で皆さんにあれこれと説明したあと、全員の記念写真を撮り、解散した。付近の丘に昔インディアンが掘った井戸の跡があるので、これを見に行った人も大勢いた。

周知のとおり、ここは一九五二年十一月二十日、ジョージ・アダムスキーが金星人オゾンと会見した有名な場所、この体験記が発表されるや大センセーションを巻き起こし、米国各地から参観者が押し寄せたために、この地点にレストランやその他の施設などができて、いつとき賑わったけれども、いつしかなくなってしまったとス氏が語る。

それよりも重要なのは、この場所が二千年前のある事件と関連があるからで、

そのゆえに二千年後に、あのようなコンタクトが行われたのである。この詳細について皆さんに話してもよいかとス氏に尋ねたら、自分にはわからない、あなたの判断にまかせようと言うので、結局、私も話さなかった。

だがここはア氏が偶然にコンタクトした場所ではなく、世界史を書き替えねばならぬほどの深遠な意義を帯びた地域であると云えるのである。

あまりに暑いので、いつまでもいられない。私たちはぞろぞろと元のバスの方向へ引き返した。

道路わきに停めてあるステックリング氏の車の所まで来て、氏がトランクのアイスポックスからコーラを取り出してくれたので飲む。すごくおいしい。冷えた液体が五臓六腑にしみわたる。

私は車のそばで立ち飲みしながら遠くの山の峯々を見つめていた。

突然、白く細長い物体が視線の方向の馬の鞍状の峯のくぼんだ空間を右から左へ水平にゆっくりと飛んだ。

「あれは何だ?」

驚いて、そばにいたステックリング氏に呼びかけた。

「飛行機にしては遅すぎる。UFOかもしれない!」

氏の声も少々興奮気味だ。

「UFOだ!」

私は叫んだ。ス氏はパイロットの免許を持つほどのヒョーキ野郎だから、飛行機には詳しいので、見誤ることはないだろう。

その物体が左側の峯の背後にかくれて

見えなくなると、またも右方から別な白い細長い物体が出現して、一番機のとちをゆっくり追い、これも峯のかげにかくれた。そして両機とも二度と姿を見せなかった。

「うーん、スペースシップに間違いあるまい！」

ス氏が感歎の声を放つ。

それにしても我々二人しか気づかなかったとは、どういうことなのでしょう。何かの意味があるのだろうか。まもなく志田氏が来たので目撃したことを話したけれども、すでに消えて見えなかった。

後日判明したが、実はこの物体を目撃した人は他に数名いた。コンタクト地点で全員の写真撮影していたときに、まず橋口真市君（静岡県）が発見し、次に野口敏治さん（静岡県）もうながされて見たがそのときは黙っていた。大声で皆さんに知らせればよかったのに申し訳ないとリマ市で野口さんが洩らしていた。出現したのは一機だけだったという。川上英明氏（東京）も見たと話す。菊地喜之君（千葉県）も目撃したけれども、本誌68号十七頁二段目の記事を書いて出して8mmカメラに収めなかったという。だれの眼にも細長い白い物体には見えなかったようだ。別な惑星から来た母船だったのか！

デザートセンターを離れるときに私たちはステックリング氏と別れた。氏は、ビスタに数日間滞在する志田夫妻と塩津憲雄君（京都）を車に乗せてビスタへ帰り、私たちのバス二台はロサンジェルス

へ直行するのである。

広漠たるモハービ大砂漠の一隅をまたもバスは疾走して、四時三十分ロサンジェルス空港に到着し、七時三十分発のブルー航空九二一便で八時に離陸した。いよいよ南米ペルーのリマを目指すのである。機体はDC8-62なので機内は狭い。私は八時間近い夜間飛行中、一睡もできなかった。



●熱砂のコンタクト地点



●ロサンジェルス空港で待機

憂鬱なリマ市

十六日、午前六時前にリマ空港へ着陸した。日本を出発する前に、わが旅行団の世話をする現地の旅行社の東京支店長から聞いた話で、リマは朝夕と日中の温度差が激しいから、灼熱のデザートセンター見学時の軽装のままでは早朝リマへ降り立つと必ず風邪をひくので厚目の服装を別に用意せよということだったが、空港へ着いてみると予想したほど寒くはない。気温を計ってみるとセ氏二十一度もある。私は長そでのアンダーシャツとモヒキを機内で着用し、外では上衣を着たが、暖かすぎるくらいだった。

市内へ出てみると、空はどんより曇り、いまにも雨が降りそうな憂鬱な天候である。こちらは真冬なので晴れる日は少ないのだ。市街は汚くて、いかにも開発途上国という印象を受ける。到る所、不潔な雑然とした様子は中米の諸都市と同じだが、なぜかメキシコのような陽気さがなく、何とも言えぬ哀愁を感じさせ

るのである。このファイリングは以後ペルーとボリビアの二カ国をまわるにつれて常につきまとい、ロサンジェルスへ帰ったとたんに、憑き物が落ちるようになっている。

一行はまずリビエラホテルへ入った。

一流ホテルなので設備は上々である。

午前九時からバスで市内見学を開始した。サンマルティン広場、市民センター、最高裁、イタリヤ美術博物館、エクスポ公園、国立競技場その他を次々と眺めながら、やがて黄金博物館へ入る。

周知のとおり、リマ市はインカ帝国を滅亡させたスペインの大悪党フランシスコ・ピサロが一五三五年一月十八日に中央寺院とピサロ邸（現在の政庁）の定礎式を行ったときに始まるのである。以来、悲劇のインカ帝国にかわってスペインの黄金狂たちの活躍舞台となったこの国や中南米諸国は、おそろしいほどに征服者の影響を受けた。言語はすべてスペイン語で英語は全く通用しない。インディオの女性たちの服装からして山高シャッポに幅の広いカラフルなスカートという独特なスタイルとなり、今日に及んでい。むかし彼女らに西洋の山高シャッポを売りつけたのはスペイン人だ、いやドイツ人だと、諸説紛々らしいが、いずれにせよ、優雅なインカ時代の服装をこらうまで珍無類な格好に変えた罪は永劫に消えまい。ついでながらモンテラと呼ばれる平べったい美しい型の帽子をかぶっているインディオ女をたまに見かけるが、これこそインカ帝国時代から続いたクスコの伝統的な帽子なのである。



●リマ市内のインディオの婦人

人口五百万のリマ市は植民地時代の古い寺院やコロンア様式の建物の残る旧市街と、近代的なビル林立する新市街とで形成されるが、山高帽のインディオの婦人はまだ市内に氾濫している。

現在のペルーを中心とするインカの歴史はさほど古いものではなく、十一世紀頃から興ってクスコを首都とし、南米大陸の西側南北一千キロ一帯を制覇した大帝帝国であったが、わずかに二百名弱の手兵を率いてこれを撃破したピサロは、一五三三年八月二十九日、最後のインカ皇帝アタワルパを謀略により処刑して、あえない最後をとげさせたのである。

勇猛な大軍団を擁する太陽崇拜の強大な帝国が、なぜこうも簡単に破れたかは大きな謎となっており、二十挺ばかりの鉄砲(当時のインカ人は雷と呼んだ)

に恐れをなしたからだという説もあるが定かでない。

しかし私たちに興味のあるのはインカ帝国よりも謎に満ちたプレインカ(インカ以前)の遺跡である。これがまた複雑で、チャビン文化、モチーカ文化、ナスカ文化、チムー帝国、クイスマンク帝国、チャンカイ文化、チンチャ帝国等、各種の文明が大アンデス一帯に興亡し、その遺跡群が無数に散在する。この歴史の概要を暗記するだけでも大変だが、私たちは特に宇宙的な意義のある物に重点をおいて、この旅を実施したので、詳細は省略しよう。南米には血腥い闘争の跡に、何とも説明のつかぬ不思議な遺跡があるのだ。ナスカの地上絵や線型模様などはその代表的なものであり、宇宙問題と関連するのである。

いつの時代も人間は不変

さて、黄金博物館にはその名のとおり昔の黄金郷時代を思わせる無数の黄金の首飾りが地下に陳列してある。いずれもかつて、だれかの首からぶら下げられていたのだろうが、人間はすべて消滅して物だけが残った。「これは自分の物だ」と思い込んでいても所詮あの世へまでは持って行けないという例証だ。

一階は武器コーナーとなっている。台所の包丁を見ただけでもゾッとするのは刃物に弱い私は、昔の鋭利な刀剣類を正視できず、すぐに退散する。

ここを出て十時四十分にはバスで出発し、メラフローレス通り、ラルコ大通りを通り抜けて、ラファエル・ラルコ・エレ博物館へ行く。ここはチャンカイ文化の土器の蒐集で有名だ。トゥモロコンを発酵させて作るチチャという地酒を入れる土器の口の形は面白い。土びんの上に湾曲した把手のようなパイプがあり、その上部に口がある。これにより酒をつぐときにドクドクという音を消して静かにつげるのだという。

別棟にはインカ時代のセックスを表現したツボが数百個並べてあり、壮観である。四十八手を実演中の男女の像が各ツボに取り付けてあるのだが、その姿態は現代人のそれと全く同様だ。なんとという天真爛漫な種族だろう。ユーモラスでおかしくなってくるけれども、わが旅行団は冷静そのもので、数名の白人女性がキヤーカー騒いでいるだけだ。



●リマ市中央広場の政庁前

十二時に外へ出ると曇天下の市街はうすら寒い。

市の中央広場へ行き、前述のピサロ邸だった政庁をバックに全員の記念写真を撮影する。

スペイン人が昔建設した町は一定のプランに従っている。町の中央にソカロという四角形の広場を設け、その周囲に政庁や寺院を建てるのだ。こうした都市は中南米諸国でいやというほど見られる。都市建設や石造の寺院作りにかけては抜群の技術を誇ったスペイン人も、原住民

を虐政で苦しめたのでは大寺院も悪の象徴でしかない。

このあと一時半にレストラン「シャネルスイソ」で全員昼食をとる。ここではスペイン風ペルー料理のセビーチェその他が出た。相当地に美味だ。セビーチェとは白身の魚の切身にレモン汁、トウガラシ、玉ネギ、レタス、ピメンテなどを混ぜて漬けたもので、独特の酸味がよい。

午後は自由行動となったので、三時半にホテルの自室で就寝する。数日間の寝不足がたたって熟睡した。

七時四十分田中氏から電話で起こされ、大急ぎで身仕度をして地下の食堂へ行く。これから結団以来最初の全員の正式ディナーが始まるのである。

挨拶をすませた私は乾杯の音頭をとった。またも全員の大歓声がとどろく。続いて山口緑君(山形市)の誕生日とあって記念品を贈呈する。ビールがうまい。トウモロコシ酒のチチャが出た。初めて味わうのだが、おいしい酒だ。メキシコのテキーラをベースにしたマルガリータの味に似ている。

九時より一同の自己紹介を開始した。この時までこのような機会はなかったのだ。和気あいあいたる雰囲気になかにディナーは終了し、十時前に全員記念撮影を行って散会した。

自室へ帰ってベッドに入るも容易に眠れない。やたらセキが出て汗が流れる。慢性気管支炎が少し悪化したらしい。ミノマイシンを飲む。結局、朝方五時半まで不眠のままですごす。

高山病は恐山病

十七日。今日はクスコへ行く日だ。こは標高三千四百メートルの高地のため高山病にからぬよう極力警戒する必要があると出発前に現地旅行社の東京支店長から強く注意されたので、何も知らぬ私はすべて鵜呑みにし、そのことをうるさいほど皆さんに説明会で伝えてきたが、実は大袈裟な脅しであったことがあとで判明したのである。

ともかく私は有機ゲルマニウムを大量に飲み、長そでのアンダーシャツ、モモヒキにジャンパーを着用して出た。リマ市の朝の気温はセ氏十九度で、さほど寒くはなく、チョッキはまだ着ない。

八時三十分に出発予定のフォセット機が一時間以上遅れて、九時四十分に出発した。雄大なアンデス山脈を眼下にしたがら飛ぶ。驚いたことにアンデスは樹木が皆無で、月世界を思わせる茶褐色の奇怪な形の岩山の連なりなのだ。これが果てしもなく展開し、壮観なること譬えようもない。

すると、とんでもない高い峯に囲まれた平地に集落らしい家屋の群れが見えてきた。こんな奥地に人間が住んでいるのか。何をして食っているのだろうか。人間の強靱な生活力に驚嘆のほかない。

十二時前にクスコ空港へ着く。一同は緊張の面持ちで降り立った。ここが高山病になるかどうかの関門だと聞かされていたからである。指示されたとおりにスローモーション映画の如くできるだけゆ

っくりと歩き、おそるおそる空港ビルのロビーへ入ると、現地旅行社の日本人ガイドS氏が出迎えに来ておられた。

「なんですか、あなた方の顔は?」まるで浮浪者ではないですか。下界でだいぶ脅されて来ましたね。高山病などは笑いとばしてしまいなさいよ!

ヒゲもじゃの氏は豪快に笑って緊張をほぐしてくれた。

たしかにこの程度の高地なら高山病は多分に精神の状態に左右されることが次第にわかってきた。「高山病になるぞ、なるぞ」と恐怖心を抱くとそうなるし、何ともないと思っていれば異常は起こらない。ところがもう一人の若いガイド氏が脅しに輪をかけて半数のグループに恐怖心を植えつけてしまったため、そのグループから頭痛その他の症状を訴えて、私の所に有機ゲルマニウムをもらいに来た人が多かったのである。ガイドの優劣もさることながら、人間の精神が肉体に及ぼす影響の甚大なる事実をこのときほど痛感したことはない。私の観察によれば、きわめておとなしいタイプの人に異常が多いことも判明した。愉快な、または信念の強い人は何ともないのである。私も全然異常は感じなかった。これも精神身体医学的な要素にもとづくものだろう。

エキゾティックなクスコの町

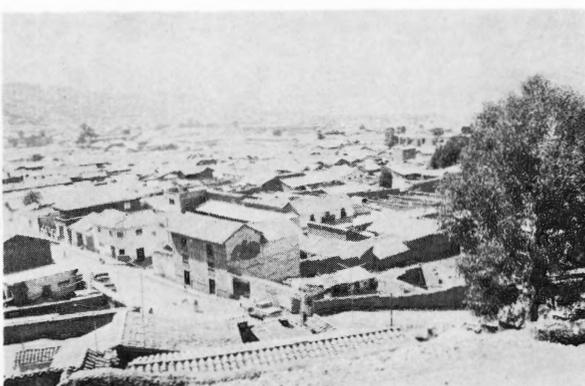
ホテルクスコは少々古びているけれども、自室の窓を開いて外を見ると、スペイン統治時代の古い大寺院がすぐ前にあ

り、日曜のこととて大勢の男女が参拝で出入りしている。空気は冷たい。

昼食後、二時よりバスで市内観光に出た。石畳の坂道が多く、昔日のインカ帝国の首都たる面影はまだ残っている。ここまで来てやっとインカ調の雰囲気を感じる事ができた。これが名高いクスコか! 好奇心が躍動し、全身の神経が波打ってくる。太陽の神殿は現在サンクトミンゴ修道院になっているが、石垣作りで優秀な技術を有していたインカ人の石積みは地震にもビクともしなかったという。

三時頃クスコ郊外のサクサワマン城塞

●クスコの市街



へ見学に行く。これはインカ帝国時代の首都防衛拠点として築かれた広大な石垣城塞である。三段から成る石垣群の中には百トンを超える巨石が存在するけれども、どのようにして運んだかは不明である。幅約四百メートルの城壁を築造するのに、毎日三万人を使役して八十年を要したという。

ここらあたりから例のデニケンが顔を出して、中南米の謎の遺跡をかたづけしから古代の宇宙人と結びつけようとするのだが、独断と偏見に満ちた彼の説には大いに警戒を要する。彼の論法でゆけば大阪城の巨石も宇宙人が運んだということになりかねない。

広大な敷地に残るサクサワマンの城壁は豪壮で男性的だが、風が冷たい。私は携帯した防寒用羽毛服を着て、更にオーパーズボンまで着用し、マスクをつけた。だが、この完全装備を必要としたのはここだけだった。四千メートル前後の高地を移動するのだから、ときには氷雪上を歩くこともあるのかと思っていたところ、来てみればベルーもポリビアも真冬だというのに雪のケもない。富士山の頂上を基準にするのは間違っているようだ。

ここで全員の記念写真を撮影後、タンポマチャイの遺跡へ行く。インカ時代の聖なる水浴場で、下部の二段の石壁の間から清水が流れ出ている。ベルーは水の質が悪いので生水は絶対に飲めないのだが、この水だけは大丈夫だというガイド氏の言葉を信用して少し飲んでみた。天然の水なのに味がしない。そして、その後

腹くだしは起こらなかった。

インディオの女たちが子供をつれて写真の被写体になり、「プロピーナ」と言いながらチップを要求する。抱かれています。二、三歳の幼女の衣服はボロ雑巾に近い。寒いのに肩などは破れて肌がまる出しである。しかしこちらを見つめてにっこりと微笑するその眼は純粹で美しい。ショックを感じた私の耳に彼女の可愛い声が響くような気がする。

「明日のことを思いわずらわないで！」

●サクサワマン城塞。寒い！



感傷の波が怒濤のごとく湧き起こり、撮影をやめてそそくさと立ち去った。

クスコ市内へ帰ってから市の中央広場へ行き、ここで大寺院を見学後、全員記念撮影をしようと、外の石壇上で待つていたけれども、皆さん、すぐには出て来ない。そのうち太陽も沈んでしまい、結局撮影はあきらめた。夕焼けの広場は、すごい異国情緒に満ちてきた。

「ああ、ここはクスコなのだ！」私は何度もつぶやいた。

帰途、土産物店に立ち寄ったが、価格が高いのか安いのか見当がつかない。小物を少々購入する。

この店の中で榊原敏弘君（京都府）が気分が悪いといって、へたばってしまっただ。どうやら本物の高山病らしい。青い顔をしている。ホテルへ帰ってドクターを呼び注射を打ってもらう手配を田中氏がされた。

私は自室で濯濯をし、しばらくベッドで寝ることにした。八時三十分頃、田中氏が夕食に誘いに来られたので、つれだつて付近のエル・トゥルコという小さなレストランへ入った。店内は満員だ。

九時頃から民族音楽のショーが始まった。ケーナと呼ばれる竹製のタテ笛、チャランゴというマンドリンに似た小さな十絃楽器、ギター、ドラム等から成る五人組の楽団で、これは素晴らしい。ケーナの演奏が見事で、実に美しい音を出す。短前綺音や裝飾音をふんだんに用いる奏法は日本の横笛に似ているが、どうやらタンギングを応用しているようだ。僧衣のような黒いボンチョを着た五人

●リャマを引く少女。かぶっている帽子はモンテール



の男が哀愁に満ちた曲を奏で、一曲終わるごとに客は歓声をあげて拍手する。有名な「花祭り」になると観衆は熱狂して手拍子を打ちながら唱和する。食事は美味で、うまいビールに陶然として熱演に耳を傾ける。あらゆるタイプの音楽に関心をもち、理解する私にとってこうしたひとときが最高の楽しみなのである。マラーヤやブルックナーもよいが、中南米の民族音楽にもたまらない魅力があるのだ。

メキシコの民謡は陽気で明るいかれども、南米ベルーやポリビアの音楽はマイナーの曲が多くて哀調を帯びている。抑圧された種族の悲痛な叫びが表現されているかのようだ。こうした種族になぜか私は親近感がわくのである。

驚異のマチュピチュ遺跡

十八日は七時三十分ホテルを出て、サンペドロ駅より汽車でマチュピチュ目指して出発した。前夜睡眠薬を飲んで熟睡したのだが、早朝六時半にドアをノックされて眼覚めると少し頭痛がする。これは高山病ではなくて睡眠不足のせいである。外気温度はセ氏十一度。かなり冷える。

汽車は定刻八時をなんと二時間半遅れて十時半に出発した。これは南米式である。こんなことにいちいち立腹していたら中南米は旅行できない。メキシコでは列車が二十四時間遅れて出ることもある。

やがてクスコの町の土俗的な市街が眼下に展開した。町全体が土でこねあげられたような印象を受ける。家も何もすべてが茶褐色だ。このアンデス山岳列車はスローだけれども、快晴下に牧歌的な広大な風景が窓外を流れる。

一時十五分頃、彼方に白銀のペロニカ山が見えてきた。高さ五千八百メートルのこの美しい山は、イエスがゴルゴタの刑場へ引かれるときにその顔の汗をふいてやったという女性の名をとって呼ばれるアンデス山脈中の名峯である。まさにペロニカの高貴な優しい心を永遠に象徴する山だ。

二十十分に汽車はマチュピチュに到着した。クスコから百二十キロの地点にあるこの遺跡は、海拔二千四百六十メートルの断崖絶壁上に築造された不思議な石

造都市である。いつの時代に、だれがこの都市をどのようにして作ったのか、全くの謎である。だから「幻の空中都市」と呼ばれるのだ。スペイン人の侵略をのがれた種族がここに住みついたという説もあるが、それは少々おかしい。スペイン人の脅威と、これだけの石造りの都市をこんな岩山に建設する冒険性が釣り合わないからだ。

駅に着くと大変な観光客で、白人も多く、わずかに三台の小型バスで山頂まで運ぶのだから、長蛇の列をなしてしばらく待たねばならない。日差しが暑くて、シャツ一枚でも汗ばむほどだ。長時間待たされて、三時五分発のバスにやっと乗ることができた。これに関しても東京の支店長から聞いた話はかなり食い違っていた。「あわてて早いバスに乗らなくても、すぐにバスは帰って来るから、あとのバスに乗るほうがよい。早く行った客はすぐに遺跡に入れないので、どうせ入口で待たされる」という内容だ。とんでもないことで、ここでは早いバスで登った人がトクをするのである。

日光のいろは坂みたいな曲りくねった狭い山道はかなり乱暴な運転でぶつ飛ばすから危なくてしようがない。下は千仞の谷底だ。窓から外を見るとゾッとす。約二十分登山頂のレストランに到着してすぐ食事をした。食事はスープ、魚にライス、ケーキ付きで二百五十ソレス。日本円にしてたった二百円だ。これも遺跡に劣らぬ謎だが、とにかく安いに越したことはない。

食事後、一同と共に遺跡へ行く。三面

をウルバンバ川に囲まれた険しい大岩壁上の狭い台地に、神殿、宮殿、祭壇、浴場、住居、一千余の階段などが残されている。この驚異的な光景は白昼夢そのもので、呆然として首をひねるだけだ（4頁タイトルのバック写真を参照）。

あまり首ばかりひねっていても首筋が痛くなるので、ここで全員記念撮影をやらうと、皆さんが集まってもらい、遺跡をバックに写した。帰国後現像したらまるで芝居の描き割りやバックにステージで撮影したような写真になっていた。それほど奇異な光景なのである。

五時五十分バスに分乗して下山したが、この途中で不思議な人物が出現した。ジグザグの急傾斜の山道を下るたび

●マチュピチュの遺跡にて



に、十二、三歳の少年が行く先々に待ち受けてヤットと大声で叫ぶのである。同一人物なのだ。いつの間、どのようにして先回りをするのか、不思議でしかない。バスが平坦部へ降りてターミナルへ着いたときに、その少年がまたそこで待ち受けていたのは驚いてしまった。見ると大汗をかいている。金儲けでやっているショーのようだが、だれも金を与えない。私はポケットをさぐったが、あいにくわずかな小銭しかなかった。金さえあればこの少年の神技に千ソレスやっても惜しくはない。

八時十五分発の古い日本製列車に再度乗車して、クスコに帰着したのは夜の十時十五分だった。ただちにホテルクスコへ帰り、食堂で夕食をとる。メタフォラ楽団が来てベルーの民族音楽を華やかに演奏する。これも名演だ。チャランゴとサンポーニャ（日本の笙をさかさにしたような連管楽器）が良い。

大アンデスの素晴らしい高原列車

十九日は五時起床。夜間は熟睡した。七時にホテルを出発し、中央広場で記念写真を撮りそこねたので、このクスコ駅前で撮影して、せめてもの記念品を残すことにした。インディオたちが物珍しそうに寄ってくる。気温は低くない。

八時十分に列車は出発した。これから十時間、高原列車にゆられてベルー南端のプノ市まで行くのである。茶褐色の日乾しレンガ造りの家が立ち並ぶクスコの町をあとにして汽車はゆっくりと進行す



●アンデス高原列車

る。広漠たるアンデスの大平野が果てしもなく続き、はるか彼方に土民の家が点在し、山高帽のインディオの女たちが家畜を追っている。こうした自然の雄大な風景を満喫しながら列車で旅するのは実に楽しくて、このあたりから南米大陸だという実感が湧いてきた。車内の各所は談論風発、小学生の遠足みたいな愉快な雰囲気溢れている。

この列車はガタガタだが、私たちの一等車は明らかに日本製ではない。四人がけのボックスの各背もたれの間隔が約二メートルもあり、その間に幅約五十センチ、横の長さ約一・二メートルのテーブルが設置してあるので大変便利である。

つまりレストランのボックスに座り込んだような気分を起こさせるのだ。この客席の構造は日本の窮屈な新幹線のそれよりもはるかに合理的でゆったりとしている。これで一杯やりながら旅ができれば申し分ないが、なにせ標高四千メートルの世界最高地を走る列車なので、アルコールは禁物だから、だれも飲まないし、だいたい車内で売りに来ない。車内は暑くてシャツ一枚でよい。

どこを見ても樹木のない黄土色の広大な、なめらかな山肌が草原の彼方に連続と展開し、神秘的な美観を呈している。溜息の連続だ。

四時頃に汽車は標高四千二百メートルの位置にきたことをガイドのS氏が知らせた。ときたま停車するので外へ出る。風が冷たい。五時半頃、大アンデスの彼方に夕陽が沈み始め、草原は暗くなってきた。

燃然たる太陽、車内で民芸品を売る、不潔なるも純真なインディオの女たち、大草原、ビクーナ、リヤマ、アルパカなどの愛すべき動物、人なつこい少年たち、訛りの強い南米スペイン語――。

素晴らしい長途の旅は六時十五分、夕陽を眺めながらハカ駅に着いて終了した。ホームに出てしばし待機する。気温はセ氏十二度。しかし寒くは感じない。盗賊が多いというので全員で荷物を厳重に警戒しながらバス二台に分乗して七時にプノ市に向かう。

八時にプノ市のティティカカ湖畔のホテル・トゥーリスタスに到着。九時十五分よりホテル内の食堂で夕食をとり、ピ

ールを少し飲む。ここも四千メートルの高地だが列車旅行で体が馴化しているから少量のアルコールなら大丈夫だと判断した。そして何ともなかった。

ティティカカ湖上空の 土星型円盤！

二十日は早朝五時に起床、六時すぎにバスで出発。かなりの強行軍だが、皆さんは不平も言わずによく協力される。

車は美しい湖畔の道路をたどって八時二十分にフリという船着場へ到着した。陸に近い湖中には例の葦が無数に生えている。しばし散策後、船が来るまでティティカカ湖をバックに全員の写真を撮る。このとき民芸品を売りに来た土地のインディオの婦人たちに一緒に写らないかと誘いかけたら大喜びして仲間になってくれた。これはよい記念になる。なぜならインディオの女は写真に撮られると魂を抜かれると信じて撮影をひどくいやがるからだ。カメラを向けて水をぶっかけられたこともあった。

ティティカカ湖はペルーとボリビアの国境に存在する長さ百九十二キロ、幅六十四キロにも及ぶ淡水湖で、標高三千八百メートル、世界最高地の、海のような大湖である。海を持たぬボリビア海軍はここで演習をやっているという。多くの小島が浮かび、なかでも太陽の島は伝説に満ちて名高い。ここを時速五十六キロの水中翼船で九時二十分に出発した私たちはコバカバーナに向かった。

しかし、乗船する前に山口緑君（山形市）と一緒に写真に写ってくれと私に誘

いかけたので、武田充弘君（名古屋市）と三人で湖をバックに立ち、山口君のカメラを安藤澄雄君（宮城県）に渡してシャッターを切ってもらったところ、帰国後現像したら、なんと土星型円盤が湖の上空に鮮明に出現していたのである！（表紙写真参照）撮影時にはだれも気づかなかったが、これは皆が棧橋に向かいだして空を凝視した人がほとんどいなかったからだろう。

この船の中にボリビア人の女性ガイドさんがいて一行に付き添った。セルファ・レンドンさんというこの婦人は日本語が達者である。それもそのはず、名古屋に七年もいて日本人と結婚したが、離婚して現在は独身だという。三十歳なかばに見える陽気な女性だ。

コバカバーナに着いた一行は十六世紀の建立という大聖堂へ見学に行った。名前前からして美しい町を想像したが残念ながら予想はずれた。どうしようもない貧村である。しかし町の様子はどう見てもスペインの田舎町そっくりだ。おそろしいほどの影響を与えたのだ、スペイン人は――。

コバカバーナという名の町はメキシコにもブラジルにもあるが、本家本元はこの町で、もとはインカの神様の名前だとセルフアさんが説明する。

色の浅黒いインディオの婦人が民芸品を売りに接近する。いったいにペルーやボリビアのインディオの物売りはメキシコのインディオのごとく執拗ではない。だが「いらぬ」と言って断ると残念そう顔をするので、悪いことをしたよう

に思い、「あなたは美しい女性だ」とスペイン語で話しかけると、相手は恥ずかしそうにニタッと笑う。ああ、女というものは永遠に自己の美に憧れるのか！
 十一時十五分に再度水中翼船に乗り、この町を離れて太陽の島へ向かう。インカ帝国創立にまつわる伝説の島だが、詳細は省略しよう。約三十分で島へ着き、五十メートルの高さの台地へ出て湖水を

遠望する。南米にきたとは思えないような日本の風景だ。

ここでボリビア時間に合わせて時計を一時早め、一時に島を離れて二時十五分にボリビア側のワタハタという町に着いた。すでに入国の手続きはしてあるので、空港のごとく税関を通過する必要はない。しかしあちこちで銃を持った兵隊を見ると、やはりクーデター後の軍事政

●コパカバーナの裏通り



●ティティカカ湖の葦舟

権の支配を実感する。私たちがこの国へ来る一週間前まで日本人観光客の入国は禁止されていたという。運がよかった！
 湖畔で昼食後、小型バスでまず二十二名がラパス市を直指して出発し、五時に世界最高地の首都へ入り、ホテル・クリリオンに到着。七時三十分全員集合して町のレストランへ行く予定なので、私は自室で大洗濯をやり、荷物の整理をしてスーツに着換えた。洗濯はむかし軍隊で鍛えられたから少しも苦にならない。何事も経験が大切だ。

七時四十分頃にラパス市内のレストラン「ロス・エスクードス」へ一同行く。広いキャバレー風の店で、八時より正面のステージに四人組の民族音楽楽団「ロ



●ティティカカ湖畔にて

ス・ハイラス」の演奏が始まる。前座だから技巧はまあまあだが、次に出た「ティトー・モルラン・イ・スコンフンド楽団」の素晴らしい演奏には全く熱狂的になってしまった。特にケーナ奏者は抜群



●ティトー・モルラン・イ・スコンフン
ド楽団

で、感嘆のほかない。哀愁を帯びた美しいメロディーには虐げられた種族の悲痛と歓喜が秘められ、「生きよう!」という雄叫びを大アンデスの彼方に響かせるかのようで胸が熱くなってくる。

あいだで民族舞踊もあり、次に「インバクト・コロンビア楽団」、最後に六人編成の「ブルボ・コバ楽団」が出演して絢爛たる演奏を競う。

感動と興奮に包まれながら夢中で撮影し、録音を続けて、終了したのは十時だった。食事は魚を主体にしたボリビア料理で、おいしく、飲み物は飲み放題だが

四千メートルの高地のこととて、ビールをジョッキに二杯飲んだだけだった。これで一人米ドル二十五ドルだから安いものだ。

五年前スペインのマドリッドで八百五十ペセタも取られ、ワイン一杯だけでインチキフラメンコを見せられて苦い思いをした私は、中南米のインディオたちの真剣な演奏に胸を打たれるのである。そのマドリッドでインチキとも知らぬ多数のお人好し日本人観光客が大喜びしていた光景が浮かんでくる。

拍子抜けしたティワナコの遺跡

二十一日は七時半に起床。八時前に階下へ降りてこの旅行記のためのメモをつける。外は快晴だ。本日はティワナコの遺跡視察の日である。

九時四十分に出発したバスは、まず市内を観光しながら進行する。サンフランシスコ教会前を通り、メルカード(市場)へ行く。ラバース市もリマ市以上の、きわめて土俗的な町で、メルカードは大規模である。多数のインディオや小さな店でごった返し、ずいぶん不潔だが、やはり私の眼にはエキゾティックに映り、たまらない魅力がある。欧米の完成された都市よりも、こうした原始的な町がなぜか好きなのだ。ここで息子の土産に銀メッキの手作りのカップを十五ドルで買う。

次にムリリョ広場へ行き、国会議事堂をバックに全員記念撮影をする。大勢のインディオが珍しそうにたかってくる。一時に奇怪な形の岩山が林立した「月



●ロス・エスクードスからバスで帰る愉快な仲間たち

の谷」を見学後、二時五十分にはバスでボリビアのハイライト、ティワナコへ向かった。ガイドさんはボリビア生まれの日本人、村上久美子さんという二十一歳のお嬢さんで、スペイン語と日本語の両方を母国語とする完全なバイリングイストだが、まだ日本へ行ったことはないという。

広漠たる大平原の土の道路をホコリをまき上げながらバスは疾走する。原始そのものの土造の家が平野に散在し、山高シャッポの女たちが歩いていく。村上さ

んの話によると、この辺のインディオは大体二十歳前に結婚するが、婚約したら男女はまず三カ月間棲し、その間に男は女がイヤになったら実家へ返してしまふのだという。またその期間中に女が妊娠して子供を産んだと捨てられてもそれぎりだという。おそろしく男尊女卑の世界だ。何もかもが男に都合よくできているらしい。

しかし写真をやる私は、あらゆる風景を写真的な視覚でとらえるので、この原始的な風景は絶好の被写体である。ペルーやボリビアのどこを見ても被写体の宝庫だ。カメラを手にすればフィルムはいくらあっても足りない。

四時半頃、目指すティワナコの遺跡に到着し、見学するのに、意外と規模が小さく、デニケンが紹介して有名になった「太陽の門」も想像したほどの巨大なものではなかった。これなら古代の屈強な人間が四、五百人で引つ張って運べるんじゃないか。ここでもデニケンのハッタリに、してやられたような気がする。彼の功罪としては、こうした遺跡を世界中の観光客の注目の的にしたというのが功績の部類に入るかもしれない。だがティワナコまで来る日本人は多くはなく、六十名もの大旅行団は空前絶後だろうとガイドさんが言っていた。大体日本人観光客はペルーまで来るけれどもボリビアへは入らないのが普通らしい。

いささか拍子抜けして引き返すバスの窓外を見れば、夕焼けの大草原の彼方に土民の民家がシルエットとなって点在する光景が美しく流れてゆく。山々はすべ



●ボリビア市の世界最高地の首都ラパス市、国会議事堂前（標高3,800m）

て赤茶けたハゲ山である。

七時半にホテル帰着。八時より八階の食堂で全員の夕食会を開催する。食事中ガイドの村上さんが別れの挨拶をした。

榊原君の容態が悪化したので田中氏が医師の手配をした。

食事後、九時半よりホテル内のバーで若林君その他教名の方々と歓談しようという事になり、十時までそこにいたが閉店となったので、外へ出て店を探すも見あたらない。軍市政権下で夜の十一時以後は外出禁止令がしかれている。歩きまわってみると広い通りにはネコの子一匹いない。そのうち軍服姿の男たちが武器を持って現れたので気味悪くなり、ホテルへ帰ると、なんと閉店したはずのバーがまた開いている。十時で閉めたあと、ふたたび闇で営業するらしい。若林君、菅原恵子さん、首藤君らと共に入り、愉快に談笑した。榊原君が付近の病院へ入院したという情報が入ったけれども、出かけたら最後、帰れなくなるからうっかり見舞にも行けない。

このバーで十二時まで楽しく語り合った。今度こそは本当の閉店だというので立ち上がった。店主と思われる、でっぷり肥えた大男のボリビア人が私に向かい「日本人が六十名もボリビアに来たのはこれが初めてだ。これだけの人をつれて来たあなたに対して最大の敬意を表したい」という意味のことを訛りの強い英語で話し、ビールをジョッキ一杯おごってくれて、握手を求めてきた。私が団長であることをだれかに聞いたらしい。私は心から感謝して握り返した。他の若い



●ティワナコの遺跡「太陽の門」をバックに陽光を浴びる一行

ポリビア人たちも尊敬感に満ちたまなざしで私の方を微笑しながら見つめていた。これは南米に来て以来、最高に感動的な瞬間だった。

私が受けた印象ではペルー人よりもむしろポリビアの方が素朴で、日本人に対して非常に親近感を持っているようである。軍事政権はすでにアメリカから見離され、援助を断ち切られたので、頼れる国は日本だけというらしい。だからこちらが日本人とわかると彼らは親愛の情を示すのである。また、ポリビアはペルーと違って日本人の移住が容易である。日本人の技術を高く評価しているのだ。そこで、将来は農業技術者として南米へ雄飛しようと遠大な計画を立てている首藤君（熊大生）に対し、「この国の悲惨なインディオを救うのは貴君の大使命だ。原始的な女たちの山高シャップを脱がせて、パンティーをはかせ——脱がせるのかもしれないが——、近代的な作業服を着せて、機械化された大農式の農園を営み、彼女らに労働の場を与えて日本人の腕を見せてやるべし」と、バーの中でぶちまかったら同君は眼を輝かしてうなずいていた。事は簡単にゆくまいが、豪快な男だから、いつかやるだろう。

なまめかしくないインカの浴室

二十二日は朝七時に起床する。病院に詰めている田中氏から電話があり、榊原君の容態が好転したという。大安心して荷作りをし、十時三十分病院へ見舞に

行く、かなり元気そうな様子だった。この病院では受付の女性も医師たちも全く英語をしゃべらない。スペイン語でまくしたてるので、スペイン語の重要性を痛感する。医療態勢もひどく遅れているようだ。

十一時二十分に全員バスで出発し、空港へ向かう。再度リマ市へ引き返すのである。一時三十分ペルー航空六一六便で離陸した。

ラパス空港で休憩していると、日本大使館の方が来られて、ポリビア人のジョバンナという女子大生が日本へ遊びに行くのでリマまで一緒に行ってくれと言われる。可愛い女性だが、これがまた英語をほとんどしゃべらない。英文はある程度読めるようだ。仕方がないのでスペイン語と英語のちゃんぽんで話す。しかし日本でも英語が達者にしゃべれる人は非常に少ないから、ポリビアも日本も同じことだろう。

二時十五分にリマ空港へ着陸して、スリッパを履き確認後、ただちにバスでパチャカマの遺跡へ行ったが、これは失敗だった。国立博物館かパチャカマの行跡にするか後者を選んだのだが、行ってみると、たいした遺跡ではなく、プレインカの石垣と、インカ帝国の女関係の遺跡が残っているだけで、特に皇帝の側室候補者たちの養成所だという建物の中の浴室をガイド氏が面白おかしく説明するのだが、現物を見ると全く色気のない殺風景な石の囲いである。ただしカミンリの刃一枚入らないといわれるインカ特有の素晴らしい石壁が狭い通路に残って

おり、これは一見に値する。ここには百八十人の側室がいて、これにより皇帝の子孫の繁殖を図ったというが、それにも皇帝自身が世界一精力絶倫男でないととまるまい。

五時十五分にバスで帰途につき、六時十分にホテル到着。自室へ入り、しばらくベッドで横になって休息する。昨夜が遅かったせいか、それとも高地から低地へ帰った安堵感のためか、疲労が強く、全身がだるい。夜九時前に田中氏から電話があり、ホテルの地下食堂で一緒に夕食をとる。

団体旅行の世話は楽ではない

二十三日、朝七時三十分起床。熟睡したので気分爽快である。暖房はないが室内は暖かく、窓をあけると空はまたも



●パチャカマ遺跡の浴室跡。ここで百八十人の側室（要するにメカケ）が交替で入浴をした

どんよりとした曇天で、スモッグがひどい。気温は九時三十分現在でセ氏二十二度もある。

今日はペルー最後の遺跡で最大の見ものであるナスカの地上絵を空中から観察するのである。旅行団を二手に分けて、先発隊は早朝五時半に出発したので、私は後続グループの添乗員としてロビーで皆さんと共に十一時にバスが来るのを待った。ところがバスはなかなか姿を見せない。フロントより現地旅行社に電話をすると十二時頃になるとい。話がずいぶん食い違っているのでいらしてきた。

十二時十五分頃K社の案内係の日本人が来たが、その態度はきわめて粗雑で著しく礼儀に欠けていたため、ロビーで強く注意した。しかし先輩の相手は謝ろうとせず、言い逃れをしている。バスの中でも連れの運転手に注意したが、要領を得ない。いい加減な会社という印象を受けたけれども以後は黙っていた。しかしその後、ナスカで田中氏にこの旨を報告したら、氏も厳しい顔をして何らかの処置をとると言う。どうもこのK社とは当初から不快な事態が続いていた。東京支店長から高山病で脅されたのもその一例である。

これからみるとポリビアでの世話を担当したS社は格段に優秀であった。至れり尽くせりのサービスをし、最後には皆さん方全員に世界最高地の空港を通過したという証明書まで贈呈してくれた。頭の良いのと悪いのとはこうまで違うものかと、知能の格差を痛感させられた旅行ではあった。

ついでながら、他人から不快な目にあわせられて常に黙認し泣寝入りするのが決して「愛」ではない。まして六十名もの大部隊をかかえる私たちは、少ない時間で最大限の効果があがるようにぎっしりと組み込まれている日程を、予定どおりにバリバリとこなしてゆかなくてはならない。停滞すれば、少なからぬ費用を出して海外へ出かけた皆さん方が大迷惑するのである。だから責任者たる田中氏も私もときには眼の色を変えて奔走する。わが旅行団をナメてかかり阻害する部外者がいれば、どなりつけてでもスケジュールどおりに動かして進軍を強行しなくてはならない。このようにして一種のテクニクを応用するのである。

不思議なナスカの地上絵

さて私のグループは午後一時にやっと小型機に分乗して離陸した。私は五人乗りの低翼機で出たが、機の安定はよい。高度四千メートル、時速二百三十二キロで飛行をし、四十分ほどして海岸を見おろすと、すごい大波が押し寄せている。例によって樹木のない茶褐色の大岩山の連続を眺めながら飛ぶこと二時間余、機はナスカ空港に着いた。空港といっても未舗装の広場みたいなもので、降りると風が強く、温度は二十五度もある。

出迎えの田中氏と簡単な打ち合わせの後、三時より高翼のセスナ機に三人が乗り込み、地上絵の観察を開始した。コンドル、クモ、魚等、巨大な絵が次々と展開するが、どうも輪郭が明瞭でない。こ

れはおそらく日中のためで、朝か夕方の太陽が傾いた頃ならば線の影が濃くなくてもっと鮮明になるのだろう。白い線模様の絵を次々と巡回するパイロットは慣れたもので、親切に大声で説明してくれるが、これは実は田中氏が私のために特別丁寧に飛んでくれと依頼してチップを握らせたからである。だからパイロットは「見たい絵があれば言いなさい。何度も見せてあげるから」と達者な英語ですすめてくれた。

特に印象に残ったのはコンドルの絵でそれに山の斜面に刻まれた「宇宙人」と呼ばれる人間の姿であった。また多くの細長い三角形の線型模様もたしかにあった。絵よりもこの方がはるかに不思議である。まるで飛行機の滑走路に似たこの台地は何のために作られたのか？

ステックリング氏によれば、このナスカの地上絵と線型模様は大昔宇宙人が描いたもので、宇宙船の標識にされたという。これらのあるものは世界各地の古代のピラミッドの方向を指し示しているというのである。だが現地のガイドさん方は宇宙人説を否定し、こまかいゴバン目を応用した縮尺と拡大図によって古代人が描いたのではないかと話していた。

約四十五分間の遊覧飛行を終えて着陸した私たちは、すぐに空港のそばの小さなレストランでバイキング料理の食事をとった。ここは砂漠のまっただ中のオアシスという感じのする場所である。

単独で旅行に来た日本人の若い娘さんをまたもK旅行社が我々団体にまぎれ込ませて一緒に扱おうとしたので一悶着起

●ナスカの不思議な線型模様



こった。

食事後四時四十五分に双発の高翼機に五人乗り込んで、約二時間の飛行後、リマ空港へ無事着陸した。

八時二十分より空港ロビー階上のレストランで全員夕食をとる。今朝のバスの迎えの遅れに対する代償として飲み物を飲み放題にせよと田中氏がK旅行者の係員に強硬に主張し、結局通した。

この食事中に私は同旅行社の若い社員と語り合い、実に有益な話を聞いた。それによると、ペルー人は日本人に対してさほどの親密感を持たず、むしろ無気力としかいいようのない、おとなしすぎる日本人を利用しようとする。一方、ポリア人は親日感情が強いけれども、東洋人を見ればすぐに中国人と思ひ込むので、日本人は損をするというのである。私が受けた印象は大体に当たっていたようだ。

そういう事情が当初からわかっていれば、わが旅行団は全員が、赤い日の丸をあしらった JAPON という文字を表記した徽章を胸につけてポリアへ入国したらモテたに違いない。私自身は日の丸と君が代が大嫌いだが、南米へ来れば日章旗は太陽の帝国インカの末裔たちを喜ばせるかもしれない。

ついに南米をおさらばする時がきた。夜間十二時三十分発のペルー航空機でロサンジェルスに向かう。隣に座った日本人そっくりの十三、四歳位のペルー人少女がひどく不作法である。ものも言わずに大股を広げて私の膝を越えながら自席から出入りする。疲労のためか夜間はよ

く眠った。

ふたたびロサンジェルスへ

二十四日はペルー時間の九時にロサンジェルス空港着。暫時休憩後、八時三十分より市内見学に出かける。やはりアメリカは瞠目すべき大文明国で、これからはと中南米諸国はあまりにも隔絶した世界である。ただし幸福とは主観的、心情的なものであるから、アングスの奥地に住むインディオが不幸で、物質文明の極に達したアメリカ人が幸福かは速断できない。我々としては常に両者を公平に観察することが肝要だろう。

市内には陽光がきらめいて、ドライブは快適である。サンセット大通りからハリウッドの野外大劇場へ行き、全員記念写真を撮り、日曜日のこととしてファミリーマーケットが休みなので、ロサンジェルス発祥の地オルベラ街へ行き、十字架前の八角堂を囲んで最後の記念撮影を行う。昨年の旅行でもこの十字架の前で撮影した。

そのあとセンチュリーヒルで昼食をとる。ここはセルフサービスの大食堂で有名である。安から多数の客がつかけている。

一時三十分頃、バスはサンタモニカ海岸の崖つぶちで停車して、ここから広大な海水浴場を遠望した。無数の人がコーラ干しをやっており、広い駐車場もある。すべてがモダンで、きれいで清潔で日本の海水浴場の比ではない。

まもなくホリデイ・イン・サンタモニ

●ロサンジェルス発祥地、オルベラ街の八角堂にて。アメリカ人家族も喜んで加わってくれた



カへ入り、自室で大洗濯をし（よく洗濯をする男だ）、そのあと8mm記録映画の撮影を担当している菊地君のために8mmフィルムを買いに町へ出るも店の大半が休んでいるため、やむなくホテルへ引き返してプールサイドで諸君としばらく遊び、その後入浴して着換えたあと、七時より食堂で最後のお別れパーティーを開催した。これも飲み放題なのだが、どうも今回の旅行団はアルコールに強い人が少ないようで、あまり要求はない。

楽しい夕食会は十時で散会し、十時半より十名ばかりの人々と共に付近の映画

●サンタモニカの海水浴場



館へ入り、^{おとな}大人の教育映画を見たあと、全員でバーに寄り、十二時まで実に愉快に団樂した^{だんがく}が、ここでもアメリカ人の客たちは私たちに非常な好意を示した。

こうして翌二十五日に全員十時三十分発日航六十三便でロサンジェルス空港を離陸し、ハワイのホノルル経由で十二時間の長途飛行後、二十六日の夕刻五時半に無事成田空港に着いて、二週間に及ぶ大旅行を終了したのである。（終）

本文中に掲載した写真はすべて筆者撮影。全員集合写真はセルフタイマー使用。

付記 全行程を通じてかなりの強行軍だったが、皆さん方は全く不平を言わず、よく指示どおりに動いて協力して下さった。これは絶讚にあたいする。一般の海外旅行では、集合時間を守らない、大酒を飲んでクダを巻く、添乗員やガイドに食ってかかる等、きわめて日本的な醜態を演じるのが普通だが、わがGAP旅行団は人間の質がまるで違うから雰囲気は高次でマナーも洗練されていた。

人間は本質的に旅人である。国内外を渡り歩き、国から国へ転生し、惑星から惑星へ移動し、更に太陽系間の生まれかわり等、果てしない旅路を、あるときは男の肉体で、あるときは女体で流浪する。一生涯は旅の途次の一瞬間にすぎない。ひたすらに多くを学び真理を探求するには、狭い殻の中に閉じこもることなく、広く外界に眼を移して、あらゆる社会を比較し、あらゆる人間の生き方を直視することが必要であらう。

●サンタモニカのバーでアメリカ人のお客さんと最後の夜を楽しむ



「アメリカ南米宇宙考 古学の旅」を回想して

(1)

〈到着順に掲載〉

宇宙愛に満ちた感動のビスタ

千葉県 志田真人

JAL六四便がロスアンジェルス空港に着陸すると同時に、遂にやってきたという感動が強く湧き起こって思わず頬が緩んだ。インドネシア滞在中から何とか機会を見つけてビスタを訪問したいと願っていたのがいよいよかなえられることになったのだ。今回は仕事の都合で一週間しか休暇がとれず、「アメリカ南米宇宙考古学の旅」の全行程を廻れないのは残念であったが、そのかわり、ビスタにて米国GAPの人々から色々テイーチングを受けることを主体に計画を立てて来たのだった。ロスの空港ではイミグレを通過する際長時間待たされたがインドネシアで待たされることには慣れていたため特別イライラすることもなかった。空港からはバスで一路パロマー山へ向かい、A氏の建てた小屋やレストラン跡、更にパロマー天文台などを見学し、夕方憧れのビスタの町に入った。米国に到着以来感動のためどうも身体がふわふわしく通訳が務まったかどうか自分自身全くわからない状態であった。米国GAPの人々を前にして、かつて経験したことのない感動の波が次々と打ち寄せて来る

ようで、立っているのがせいっぱいであった。夕食会が終了して米国GAPの人々に挨拶しているとき、ホワイティング氏から、「やあ、意外と早く再会出来たね」と言われ、ようやくわれに戻るこゝとが出来た。

翌朝五時半にヒル・トップ・モーターを出発してアダムスキー財団本部見学後デザート・センターへ向った。前夜ステックリング氏からデザート・センターは撰氏四一度位で大変暑いと言われていたので、子供連れの私はそれなりに覚悟をしていた。案の定猛烈な暑さで、おまけに子供を背負ってアップダウンの多いところを歩いたため目が眩んでしまったがA氏とオーションの会見地からのすばらしい眺めや、会見当時の色々な出来事についてA氏の興味ある説明などで疲れは吹き飛んでしまった。

デザート・センターから我々家族と京都の塩津さんの四人はグループから別れてS氏の車でビスタに戻った。その夜はS氏御夫妻、エリシアちゃん、ホワイティング氏、それにチャップマン氏と共にビスタで最近オープンしたレストランでメキシコ料理に舌鼓を打った。とにかく筆舌につくし難い程すばらしい人々で、初めて会ったような感じが全くしない。翌日午後からS氏の自宅ですす氏自身から、「私たちは生活出来る限り簡

素化する必要がある」、「(テレビシー能力を高め宇宙的な生き方をしようとするなら)シンプル人間になる必要がある」など重要なティーチングを受けたあと、夕方からパーベキュー・パーティーになり、すばらしい料理を腹いっぱいご馳走になった。肉は馬場さんの御主人のセルチャウ氏が焼き、サラダなどはホ氏が作ったとのことだったが、野菜サラダは殊の外美味で、我々はこれを「ビスタ・サラダ」と呼ぶことにした。パーティーのあとはイングリッド夫人から「我々は日常生活の中で宇宙的な生き方をする必要があるので」、「伝統的な考え方にとらわれず、自由な考え方を必要がある」

など数々の重要なティーチングを受け、身も心も洗われる思いだった。傲慢な気持や不信感などは消え失せ、子供のようない気持にならざるを得ない雰囲気であった。午前零時をまわっていたがホ氏がモーターまで送ってくれた。明日はロスへ出発するので事実上のお別れであったがそんな気は全く起こらない。「近々またお会いしましょう」と握手して別れた。

翌朝チャップマン氏が迎えに来てくれて我々をロスまで送ってくれたが、この時氏の我々に示してくれた親切は一生忘れることの出来ぬものであり、本当の愛とか親切とかはかくあるべきと大変感激すると同時に、日常生活の中で宇宙的な生き方をすることの重要さを、身をもって感じさせられた。

「英知なき知識は無意味である」と言ったステックリング氏の言葉は記憶から消えることはない。

今回のすばらしい旅行を計画・実行された日本GAP久保田会長、並びにワールドセブン社田中氏には感謝の言葉がない。

宇宙的波動を感じる

千葉県 志田恵美子

さて私共も念願のビスタ訪問から帰りはまだビスタにあるような状態でございます。この旅行に因りまして久保田先生をはじめ田中様、そしてGAPメンバーの方々の御援助をいただき、感謝しております。

ビスタでの経験は今生に誕生以来最も素晴らしいものでした。言葉では言い尽くせない程の感銘を受けました。久保田先生にはよくおわかりの事と存じます。個人的なアドバイスも含めて、彼らのティーチングのひとつひとつが胸に刻まれています。

英語力について心配だったので、足りない部分はフィードバックをもって聞きましたので、帰国後百パーセント理解できたという主人と話し合いました。私の理解は間違っていないようです。

彼らの過去世を読み取る力も素晴らしいものです。それ以上にアダムスキー哲学を基として、真に宇宙的な生き方をしているその姿に心を打たれました。先生も書いていらっしやるように、それ故に彼らの家庭にあるすべてのものが宇宙的な波動を放っているようです。そして自分の家に帰って、我家が如何に習慣的想念で満ちているかがよくわかりました。

この三日間でアダムスキー哲学に対する私の理解はより深まり、これからは実際にそれを生活に生かして行こうと思えます。ビスタの人々を紹介して下さいました。久保田先生に心から感謝しております。

ビバ・ビスタ!

東京都 藤井 洋

久保田先生が今回の旅行に私をお誘い下さいまして本当にありがとうございます。旅行は強行軍でありましたが、それでも素晴らしい旅行でありました。感激で一杯であります。旅行中で一番感激した場所は私にとって日米合同夕食会の会場であった。私は会場に入っ、席に着いた瞬間どういうわけか、涙があふれてきた。回りの人に分らないようにじっとこらえていた。最後まで残っていた私は、イングリッド夫人に「初めまして」と握手を求めた。おどろきとも、なんともいえない顔をされて、私の顔を見つめられていた。隣の斎藤泰文氏にも握手をしろとむりやり引っぱりだした。イングリッド夫人が即座に「Stay here」と言いだした。残念ながら英語が話せない私はそれ以上は会話が出来なかった。帰りのバスに戻った私はなぜか涙があふれてとまらなかった。私に取っては素晴らしい体験であった。ビスタにはもう一度参加したい気持です。天キチファンなら一度は行ってみたい所にパロマー天文台があります。ここでは非常に張り切りすぎたようです。記念

にスライドを全セット買って帰りました。生涯の思い出になったことでしょ。南米のクスコでは高山病を気にしながら星空の観測に一人で出歩きました。もちろん双眼鏡とカメラを持つての観望です。ケンタウルス座アルファ星・ベータ1星・南十字星・ほ座のにせ十字・オメガ星団など見てきました。又、飛行機から見た流れ星は地平線にむかって、非常に奇麗でした。今回の旅行でいろんな人々との対話ができて有意義でした。

最後に団長久保田先生、ワールドセブンの田中氏、同室の斎藤泰文氏を始め、すべての人々に感謝致します。ほんとうにありがとうございます。

デザートセンターで母船を目撃!

静岡市 野口敏治

アメリカ南米宇宙考古学の旅は、ハードスケジュール、高山病にもめげず、またそのようなものをふき飛ばすほどの素晴らしい旅行でした。六十名もの大部隊が無事帰国でき大成功であった裏には団長の久保田先生そして添乗員の田中さんのなみなみならぬご努力、心くばりがあったとお察し致します。あらためて心より感謝申し上げます。

今回の旅行で大きな頂点がふたつありました。そのひとつはデザートセンターでした。十五日ビスタの町に朝もやがかかり、まだうす暗いうちから身仕度をしてバスに乗込む。先導車はステックリング氏の運転する家用車、これに久保田先生が同乗する。バスの左右には広漠た

るアメリカ西部の大平原がつづく。デザートセンターに着くともものすごく暑い。雲ひとつない青く澄んだ空。真夏の太陽が遠慮なしに照りつけてくる。歩いてコンタクト地点近くの丘に登ると昨年あった記念碑はなく、石積だけが残っていた。コンタクト地点へと丘をくだってゆく。ステックリング氏の説明があり、これを久保田先生が通訳してくれる。

二千年前偉大な指導者とインデアンたちがここで宇宙の法則を探索していたのだなあと、もの思いにふける。先生の方を見るときがみ込んで全員記念写真の準備をはじめている。すると隣にいた橋口氏が肩をたたく。振り向くと上空を指さしている。見ると白銀色の細長い物体が山の方向へ静かに移動している。母船か?! 素晴らしいきれいだ。近くにいた人に「だれか双眼鏡もっていますか」と尋ねたが持っている人はいなかった。あれは何処から来たのだろうか、金星か、土星か。彼らもこの地球へ旅行に来たデザートセンターへ立ち寄ったのであろうか。彼らのなかに二千年前ここにごした人がいるのだろうか。

今日デザートセンターに母船が現れたことは大変な出来事であると思う。それとともに私達に大きな勇気を与えてくれた。見学を終えてバスに引返し、また広漠たる大平原をロスアンゼルスへ向けてぶつ飛ばす。バスの中で先生が、「見学を終えて車のところまで来た時、山の方向に白っぽい二機のUFOを見た」と発表された。これで私達の見たのも母船にまちがいないと確信を深めることができ

た。

頂点のもうひとつはナスカの地上絵の見学である。二十三日この日は朝からわくわくして四時半に目が覚め、早々と身仕度をすませ食堂にも一番乗りである。今日はセスナ機に乗るから朝食はすくなく、よけにたいらげてしまった。七時ごろリマ空港から双発十人乗りの飛行機でナスカの空港へ、そこから単発のセスナ機に乗り変えて地上絵を見学する。四人乗りのセスナ機が三機用意されていて一度に九人が見学できる。いよいよ私達の番がきた。パイロットの横に菅原さん、後に橋口氏と私が乗り込んだ。シートベルトをガッチリ締める。「しっかりとむよ」とテレバシーを送る。滑走路はジャリ道なので震動がもろに伝わってくる。離陸してからもエンジンの音がすさまじいが私にとってはジャンボジェットよりこの方がより飛行機らしく非常に楽しい。まるでセスナ機と一体化しているような感じであった。書物などで見覚えのある絵が次から次へと展開してゆく。地上は自動車が行き交った跡があり、だいぶ荒されているようだ、車を規制して保存に力を入れるほど予算がとれないようである。三、四十分の飛行であったらうか、しかしほんの瞬間の出来事のように思える実に素晴らしい飛行であった。

これらナスカの絵は、円盤内のストーリー上にまずイメージによって絵を描きだして、その手前の操作ボタンで大きさ方向などをきめ、ボタンを押すと、その

イメージどおりの絵が円盤から放射されるある放射線によって地上に描きだされてゆく、このようにして次々に描いていったのではないかとひとり静かに昔のナスカに思いをよせる。

回想の南米旅行

名古屋市 福田昌利

私は昨年続きまして、GAP旅行団に参加させていただき、ありがとうございました。

数多くの反対を押し切って参加する価値がありました。

ゾーリのような肉を、たらふく食べられるのも海外旅行の魅力ですが、もっと精神的な勉強をさせてもらいました。

いつも感動的なのが飛行機の離陸です。新幹線よりも速い滑走をして、ふんわり浮かび、失のように飛んでいく。まもなく見えて来るのが九十九里浜です。

私は日本近海に操業している小さな漁船を見ておりました、なぜだか家族にもこのぜいたくを、あじあわせてやらねばと思いました。

パロマーガーデンズのレストラン跡ではアダムスキーの高貴な波動にふれ、身がひきしまる思いでした。

デザートセンターには、久保田先生ステックリング氏、北海道の大橋様が、母船を目撃されたそうですが、私にはどうも縁がないらしく、さっぱりでした。

でも私は、「あれは乗り物にすぎない、哲学さえあればよい」と自分をなぐさめております。

それにしても、広大なアメリカの自然を見ておきますと、性格もビッグになるようで、せせこましい日本人が愚かに思えてまいりました。

マチュピチュでは、頭上が晴れていて川むこうの山頂は曇って虹も出るというターザン映画のような美しい自然に目をうばわれました。

サクサワマン、テイワナコ、パチャマなどインカの多くの文化財を見たのですが、歴史はアテになりませんので、せっかくだらなく、もっとサイコモトリーに、みがきをかけねばならぬと思いたしました。

ナスカでは初めてのセスナでしたが、行き、帰り、上空とも久保田先生の塔乗機に乗せていただき幸運でした。

サンタモニカにては、男女の愛しあう美しい映画を見せていただき、たいへん勉強になりました。

以前から白人の無礼者や、その他一般人に対しては、スチュワードスの如き態度で接するものだと思っておりましたが、この世界では限界のようで、私もあまり聖者ぶるのはいやめたいと思います。

旅行中ただひとつ気になりましたのはレストランで、皆様の食べ残しを運ぶ、ポリビアン人のボーイが、悲しそうに見えたということでした。

以上、バラバラですけれども、私がこの旅行で学んだことを、述べさせていただきます。

これからも、宇宙の意識発現をめざして奮闘努力してゆきたいと思っております。ありがとうございました。

アンデスへの思い

千葉県 菅原恵子

今日は、旅行から帰り、二日目の朝です。まだ、旅の余韻と、心よい疲れが身体の一部に残っている今朝です。

私が、旅行に出かける前には、つぼみも付けていかなかった私のハイビスカスが今朝真紅な花弁をいっぱいに広げているのを見た瞬間、私は、まだ旅を続けている様な錯覚に落ち入り、それは、まぼろしの空中都市マチュピチュの断崖に咲いていた真紅のランと重なり合っていました。

穏やかな静寂があたりをつつんでいる夕暮の中、あの男の子が私達が乗っているバスよりも早く断崖を駆け降りて『さようなら』『さようなら』と言っていたもの淋しそうな言葉が今も何処からか聞こえてくる様な気が致します。

又、アンデスの峰々をながめながら牧歌的な風景の中を、十時間あまりも列車にゆられ旅をしたなんて思われなほほど一瞬の出来事の様感じられます。

駅に着き、四十分程タクシーに乗り、ホテルに着いた時は、日はとつぷりと暮れていました。

そのホテルは、チチカカ湖のほとりにあります。

そのホテルのディスコルームより眺めた満天の星々と湖面に映し出された星々の一大パノラマはあたかも私自身が、宇宙そのものに抱かれている様なファンタジーな素晴らしい景色でした。

又、今回の旅行のハイライトとも言

べきナスカの地上絵でも、私には、時間と空間を越えたロマンの旅でした。

あの様々の光景に出会ったとき、私はこの小さな惑星、私達が今住んでいる地球に対して、いつくしみの気持でいっぱいになりました。

この様な旅を企画して下さいました久保田先生、田中様をはじめ、同行の皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

では又、来年の旅行に夢をはせて……

旅行は最高の学習

三重県 大山耕一

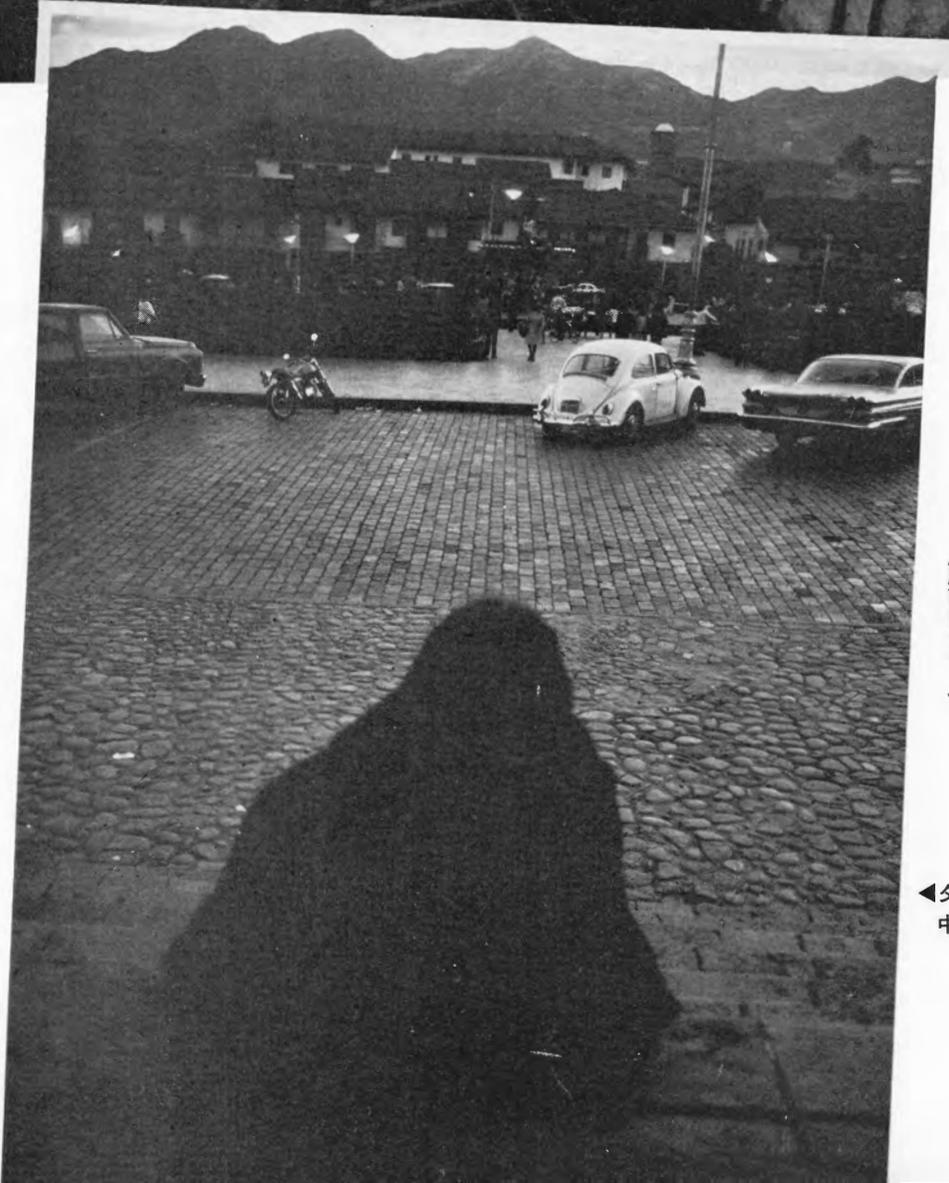
今度は、大変素晴らしい旅行に参加させて頂き、誠に有難うございました。帰国してから早くも十日以上になりますがその余韻ともいえる何ものかが一向におさまらず、それどころか逆に高まっていくようなものもあり、不思議なくらいです。今は、この静かにこみ上げてくるものを十分に咀嚼し、今後活かしたいと考えております。

今回の旅行を振り返ってみますと、全体を通してとても楽しく、しかもきわめて意義深いものがあつたと思えます。明るく自然な雰囲気を持続させるには、たしかにある精神状態を必要としますが、それを体験させてくれたGAPの皆さんは、やはり素晴らしい可能性を表わしつつある方々だと思います。

楽しさは、生き生きとした自然な活動状態であり、緊張による抵抗がないので疲れを知らず、常に新鮮です。これこそ最高の状態ではないでしょうか。ピスタ



▲朝のクスコ駅



◀夕暮れのクスコ
中央広場

幻想の南米

撮影 久保田八郎

△ニコンFE・ニッコール28mm F2.8
コダクローム64・ダイレクトプリントV
(原画はカラー)



▲コパカバーナの乞食

日本の裏側の南米大陸は実在の世画の背後にひそむ幻想の世界としか思えない。ここに住む人々は人間なのか、人間の影なのか――。

▼大平原の中の教会



の方々が言っている「楽しくやりなさい」という言葉の意味合いも、或いはこの辺りにあるのかもしれない。弛緩へのカギは楽しさこそが持っているようです。旅行中ももちろん愉快なことばかりだったわけではありません。例えば、軽い高山病になり一時不快を感じたこともありましたが、それはまた、人体の馴化能力の素晴らしさを、身をもって体験させてくれることにもなったのです。

パロマーガーデンズ、デザートセンター、マチュピチュ、その他の遺跡等で直接感じることできた印象はやはり強烈なものがあり、現地ならではの感動しました。宇宙の問題に対しても少しは認識を深めることができ、それがまた新たな意欲をわき起こさせてくれました。

以上述べてきたこと等により、学習の手段として、旅行は最も優れたものの一つであることを強く感じた次第です。このような素晴らしい体験を可能にして下さった久保田先生、田中さん、そして皆さんに、心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございます。

私もUFOを目撃した

北海道 大橋博子

パロマーの澄み渡る青い空、今日でも人里離れた感のするパロマーガーデンズやとても清しく心の和むビスタ、私は一目で好きになり任んでみたくなった。

日米合同夕食会後、イングリッド夫人と握手した瞬間、言葉では到底言い表わす事が出来ない気持ちになり、握手した

手を一生洗わなくて済むならどんなに良いだろうと思つた。

大へん楽しみにしていたデザートセンターへ向かうバスの中で、もしかしたらUFOが見られるかもしれないと感じ、見学が終わり、昼食をとり、休憩している時、何気無く窓の外を眺めると、ゆっくりと小さな白い雲の様な物が動いていて、少し上の方を見ると同じ物が見えた。私は今迄UFOの様な物を全く見た事がなく何か判らず、隣の人に尋ねたが昼間見た事が無いので判らないとの事、又誰も何も言わないので二人で何だろうと眺めていた。バスが発する時、前の位置よりも可成り上の方に同じ物が一つ止まって見え、私達を見守っているかの様に感じた。後で久保田先生がUFOが来ていたと言われ私達の眺めていたのはそうだったのかしらと思つた。

マチュピチュへ行く列車の中で銀色の光体が点滅しながら反対方向へ行くのが見えた。マチュピチュは復元修理をしてあり、近くより遠くで眺める方が素晴らしい。

クスコの教会に入った時頭を輪の様な物で押え付けられている感じに成りすぐ外へ出てしまった。外へ出るとすっきりしたが如何してあの重苦しい感じになつたか判らなかつた。

リマの空港では子供達がうろろろしているのが目に付き夜中迄も居るのには驚いた。この子達の生活はどうなっているのだろうか。

クスコからプノ迄10時間かかり、やっとプノのホテルに着き夕食の為ロビーで

待っている時心と体は列車の疲れで今にもどうにか成りそうな気持ちで一杯になり、一人離れてエレベーターの近くの壁に凭れていた。ふと前を見るとフランス人らしい三人の男女が私の方を微笑みながら目と手で元氣を出しなさいと合図を送つて来た。じつと相手の目を見ていると私の目を見て笑つて元氣を出しなさいと言う様に目で促したので、少しニタとしたが未だ私の目を見ていた様に感じた。その後の事はよく覚えていない。とても不思議な感じのする出来事だった。

十時間の列車の旅で物を売るインディオの人々、駅の風物、大自然の素晴らしき風景等が目飛び込んで来る。特に太陽が沈む前の山並みの美しい風景はとて素晴らしく一番印象に残っている。あの大自然の風景に比べると過去の遺跡は色褪せて見える感じがした。今度の旅行で一瞬一瞬を楽しみ体の調子も良く大へん素晴らしい幸せな人生の一駒を送る事が出来た。

太陽と雨の風景

宮城県 安藤澄雄

8月22日の朝、ラバスのホテル前にある小さな公園には冬の涼しい太陽の光がこぼれていた。花壇の向こうでは赤いボールを持った二人の子供と白い犬が笑っている。連日のハード・スケジュールとは一変して、その日の午前中はモーン・グールなしの自由行動で、僕に考える余裕を与えてくれた。

「なぜ僕はこの旅をしているのだから？」

アメリカはともかく、南米に興味のない僕がこうして毎日南米の光を体験していることは、ある意味で苦しいことだった。「何を学びにここへ来たのか？」

「生命の科学」を開いてみた。強い日差しを反射したのは88ページだった。「われわれは日常において或る程度の宇宙の生命に気づくように心を訓練しなければなりません。突然飛び込んだこの言葉に一瞬ハッとすると。なぜだかわからないけれどしばらくその言葉を見つめた。何かがわかりかけているような気がしてしかしハッキリせず、苦しむ。

ふつとデザートセンターの暑い太陽を想い出す。「あのときも苦しかった。昔がわからなかつた。でも、過去とは過ぎ去ってしまったこと」だと学んだ。南米が僕に教えてくれているのは何だろうか？」

物売りのおばさんが大きな籠を背負って歩いて行く。リマで出会った子供たちのことを想い出す。大きな靴磨きの箱を体を傾けて持ちながら、スニーカーを履いていた僕にまで「磨かないか」と寄ってきた少年の白い歯が浮かぶ。「そう言えは僕に何かを感じさせたのは昔作られた石の壁ではなく、今、生きているブラウンの人たちだった」確かに僕がカメラを向けたのは貧しいけれど力強く生きていた美しい人たちだった。彼らは僕に何を話そうとしているのか？ 少なくとも昔話をしようというのではないだろう。

顔を上げると石畳の向こうで登校中の女学生たちが笑っていた。白い制服がま

遠な説明を聞いていると一瞬このあたりだけ時間がとまったように感じました。

このあと予定通り南米ペルーとポリアへむかいました。そしてインカやプレインカの遺跡を見学しつつ、はじめて南米の地ですごしましたがこれらの日々は何ものにもかえりたい貴重な体験です。

数ある遺跡の中でも私は特にサクサマンとティワナコが大好きです。二百トンもある大石を積みあげ、ブーマのたてがみを模した形のサクサマンの塔は、長大な年月を経てもなおその偉容を変化させることなく、まさに圧倒される思いです。スペインが侵入する以前のインカ帝国の繁栄ぶりがまぶたの裏に浮かぶようです。

またティワナコ付近のポリビアの大平原に立った時はほんとうに溜飲が下がる気がしました。先生は「このぐらい広げれば大母船が着陸してもおかしくないねえ」とおっしゃっていました。まさに納得がゆく気がします。(中略)

このような素晴らしい旅を企画し、はたまた風習も時間観念もちがう南米で、スケジュールの完遂に苦勞された久保田先生ならびに田中さん、遺跡について独特の見解を披露して下さったK旅行社のガイド篠田さん、そして同室の藤井さんをはじめ旅行に参加された皆さんにはかり知れないお世話になりました。深く感謝いたします。Muchas Gracias!

スペース・ブラザーを見た？

東京 北條憲一

旅行から帰り、街の人波にもまれるようになって三週間になります。時差ボケの為め、一週間ほどは毎朝三時頃に目が覚め、夢の中に現れてきた旅の一場面一場面を思い返し、あるいはアルバムをめくったりなどしてポケッとした毎日を過ごしていました。

今回の旅行は僕の人生において、一つの転機となったとはつきり云えません。旅先で出会った多くのインディオやフランス、ドイツなどから来た旅行者とカタクトで会話を交したのですが、彼らは自国語にしろブロークンな英語にしろ、自分の話す言葉に自信を持っていて、これは確かに一つのレッスンの手本となりました。自分の話し方に自信を持つこと。——実際、旅行の終り頃には僕の話し方が少し変わってきたといわれるようになりました。

もちろん、なによりもGAPの皆さんと過ごせた事は大きな収穫でした。冗談を飛ばしながら、旅先で過去での記憶が甦った話をポツリとしてくれる人。否定的想念を放たないよう努力している、とさりげなく話してくれる人。等々。皆が皆、宇宙的な生き方を志しているのので一体感があり、なごやかで雰囲気は最高です。聖人になるのが宇宙的なのではなく日常生活を楽しみながら精神的に進化する事が大切なのだと、正に肌で教えられました。また、自分がこれほど自然であったのはじめての経験でした。今、その自然なフィーリングを保っていかねばと思っています。

旅行で最も印象に残っているのは、ナ

スカ観光の日でした。セスナ機で地上絵の上を旋回し、その興奮さめやらぬまま

リマ空港へ戻ってきて、ロビーでバスを待っている時の事です。小林智利さんと地上絵はすごかったなどと話をしていると、彼がスペースブラザーがいるとそつと教えてくれたのです。僕は全く気付かなくて、しかも見ても信じられませんでした。色は浅黒く現地人のようで、Sさんの隣の椅子に座っていました。見つけてはいけないかと思つて半信半疑のままチラリチラリと見ていたのですが、やはりブラザーなのかなあと思つて見ると、彼の目は明るく輝きはじめ、物事を見透しているような、それでいて万物を温く包みこんでしまうような微笑を浮かべていました。たぶんブラザーだろうと思うと歓喜の念でいっぱいになりました。しばらくしてバスが来たのですが、僕と小林さんと他数名は乗り切れずロビーに残ることになり、彼の向かい側に腰をおろしますとまもなく彼は立ち上がつて皆のあとから出口を出て行きました。

僕は肉の目で見ただけで、たぶんそうだろうとしか云えないのですが、もし本当ならばともラッキーな体験だったと云えると思います。本当だったにせよ勘違いだったにせよ僕自身にとっては旅行中最も印象的な出来事で、しかも「宇宙的に生きよう」という強い決心が生まれるきっかけとなった出来事でもありません。

旅行は大きなレッスンであり、世界を広げ、僕の人生という書物の重要なページとなりました。ありがとうございます。

した。

信念で旅行参加が実現した

山形県 柴田文字

「来年のアメリカ南米旅行にも絶対参加しよう」と決心したのは昨年の中絶旅行から帰った直後でした。どうしてももう一度アメリカGAPの本部の方々にお会いしたかったのです。そう決心してから今回の旅行が始まるまでどんなことがあっても絶対に行くんだという強烈な信念を持つと共に、自分かもう旅行に参加して皆さんと共に楽しいひと時を過ごしている鮮明なイメージを何度も描き続けていました。

時々、とても旅行に参加できそうにない周囲の現状を見ては不安感を感じたり半ばあきらめかけたことも幾度かありました。

しかし、そんな時はオースンやアダムスキーや本部の方々の写真を見ながら「絶対に行くんだ！必ず行くんだ！もう行ってるんだ！」と何度となく自分自身に繰り返し言い聞かせて、もうアメリカに行つて本部の方々にお会いしている光景を決して心から離しませんでした。

その効果があつてついに実現したのであります。今回の旅行はいろんな事情から行けるような状態ではなかったのですが、長いこと信念を持ち続け、イメージを描いていたらしだいに周囲の状況が旅行に行けるような方向に変わっていききました。本当に今でも信じられないような気持ちです。これまでも信念とイメージ法に

よって実現した願望が多くありますが、今回は特にその効果の大きさに驚かされました。自分自身の人生において必要であるとかから願ひ、信念を持ちイメージを描き続けるならばどんな物事であろうと必ず実現する—これは私も確信していたことですが今度の体験を通してその確信はより一層強いものとなりました。

こうして臉を閉じると脳裏に鮮明に浮かぶのは限らない愛情とやさしさに満ち溢れた本部の方々の笑顔、南米のどこまでも青く、深く澄みわたった空の色と天空に向かってそびえたつアンデスの山並そして数々の不思議な遺跡、貧しいインディオ達、ナスカのあの複雑きわまりない地上絵、サンタモニカの光輝く太陽と海辺……そのどれもが美しくなつかしい想い出となって私の胸中を駆けめぐります。こうしている今も私の意識はアメリカ南米の地に飛んでいます。

アメリカ南米で過ごした十数日は日本での何年分かに値すると思います。それ程に海外旅行は意味のある貴重な体験であり、この「地球」を知る上で、非常に良いレッスンではないかと思えます。いろいろな国に行き、そこに住む多くの人々の生活を知るといことは結局人間を知ることであり自分自身を知ることにつながると思うのです。

これは昨年の旅行でも感じたことなのですが、海外に出た時ほど人の親切さが身にしみて嬉しく思うことはありません。言葉や生活様式が違っても親切な行為はそれがたとえちょっとしたことでも相手の心に大きな喜びと感謝の念を起

させるし、それによって私達は国籍などを超えて同じ人間として深く、強くつながりあい、理解しあうことができると思うのです。

また、私達GAPの旅行が毎回すばらしい旅行になるのは参加したGAP会員の方々がみんな親切な、すばらしい方々ばかりだからだと思っています。

私達は本来お互い仲良く、助け合い、愛し合って生きていくよう創造されたのだから誰の心の中にも「困っている人をみたら助けてあげたい」「他人から親切にされたい」というような宇宙的な衝動があると思います。私達がその衝動のままに素直に自分自身を表現し「親切」を万人、万物に対して実践していくなら自分も幸福になれるし、相手をも幸福にしてあげることができるとは思いません。

最後に久保田先生、田中さん、旅行に参加された会員の方々、そして皆様からのお礼を申し上げます。本当にどうもありがとうございます。

思う存分に南米を満喫

岡山市 小坂 恵

一昨年のエジプト旅行が私にとって重大な転機となったように、今年の旅行もきつと学ぶことの多いものになるだろうという予感を少しも裏切ることなく、それはすばらしい旅行となりました。

今、こうして思い出すとなると、やはりビスタから始めなければなりません。日米合同夕食会でステックリング夫人に

私のへたな英語で話しかけたのです。夫人は、まるでやさしいやさしいおばさんのようで、そして私は、そのやさしいおばさんの前でもじもじしている小さな女の子のようで、自分でもふしぎなくらい素直で謙虚な気持になっていました。お別れ際に握手して下さったのですが、それまでの間ずっと、エゴにこり固まってものすごい外形をしている自分が見えるようで、もうたまたまなくどうしようもない気持になり、帰りのバスの中、ホテルで灯を落としてからも、自然に涙があふれて止まりませんでした。子供のように素直になるといことが、どういものか少しでもわかったような気がします。

翌日のGAP本部、デザートセンター訪問では、足がすくんでとてもその場を離れられなくなりました。また、デザートセンターに出現した母船らしきものに向けて、カメラのシャッターを切ったのですが、みごとに何も写っていませんでした（編者注：ワイドレンズなので写らない）。

その余韻もさめやらぬまま、あこがれ続けていつの日か必ず行こうと決めていた南米へ降りたのです。昔ながらのインディオの姿にふしぎと落ち着くクスコで、アドベ（日干しレンガ）の家に住むインディオの人々の暮しと、それを見下すようにそびえるスペイン建築との対比に、ちょっと目がくらむようでした。

南米で一番印象深かったのは、何とんでもなくスコカからプノへの十時間の山岳列車で、四方は見渡す限りのアンデス山脈とそれに続く大平原です。アドベの家

が点在する集落をはずれると、そこは何かもない、あるのは枯れ草ばかりの平原だったので、私は何もかも捨てて、あのすばらしい平原に暮らせたらどんなにしあわせだろうかと思いました。

その他、思う存分南米を満喫したのですが、ナスカでアエロ・コンドルの人々と、ガイドの青年に話しかけられ、観光客を狙うスリの話などふきとばして、いっしょに笑い騒ぎ、ついには友人となったこともよい思い出のひとつとなりました。ナスカから空路、霧のリマへさしかかった時、「日本から見れば、地球の裏側ほどのペルーに友人ができた」と思ったことに自分でおかしくなり、「ブラザーズだって友人でいて下さるのに」と思い直していると、同乗の方が窓の外にオレンジ色の光が見えると教えて下さいました。残念ながら、私にはよくわかりませんでした。

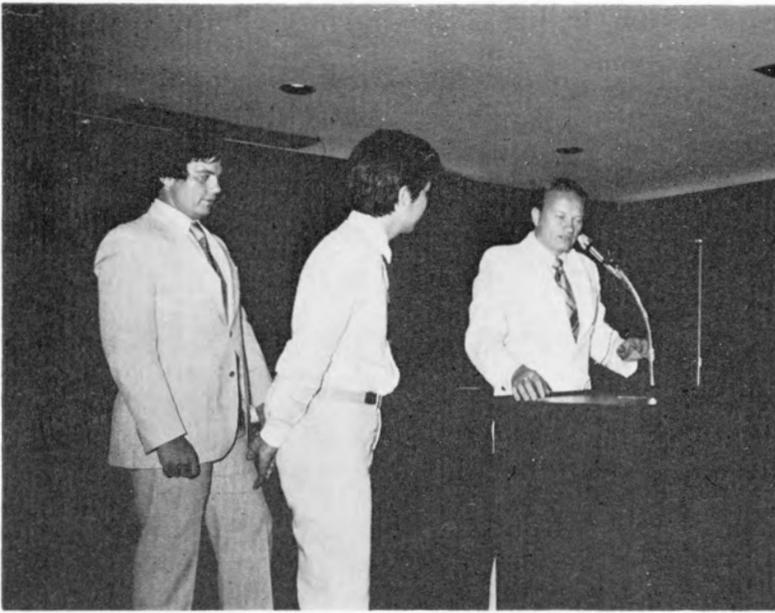
この旅行を通じて感じたことは、とりも直さず、もっと真摯な想念観察を続けマイノリティの暴走を抑えて、内なる意識の声に忠実に生きなければならぬということでした。そして、旅行中、出会った多くの人々と同じ地球の人間として、この地上に生かされていることに感謝せざるを得ません。

最後になりましたが、リマに着いたとたんノドをやられ、以後ずっとひどい風邪をひきつぱなしで、久保田先生、田中さんをはじめ、みなさまにご迷惑、ご心配をおかけしまして、申し訳ありませんでした。本当に、すばらしい旅行をありがとうございました。（以下次号）

質疑応答

宇宙と人間の真相
(1)

米GAP本部

ステイブ・ホワイティング
フレッド・ステックリング

●1980年8月14日、米カリフォルニア州ピスタにおける日米GAP合同夕食会で質問に答えるステックリング氏（右端）とホワイティング氏（左端）。

去る六月から七月にかけてカリフォルニア州ピスタのGAP本部へ研修に行った編者は、七月四日と五日にステックリング氏宅において質疑応答を行った。これは特に日本GAP会員向けに回答されたもので回答者は前半がステイブ・ホワイティング氏、後半はフレッド・ステックリング氏。重要な内容なので熟読含味されれば幸いである。なお質問はすべて久保田個人で作成したものである。

× × ×

問1 第三次大戦についてはどうですか？ 起こると思いますか？ 起こるとすれば、いつ頃ですか？

答（ホワイティング氏）そうですね。もし世の中が現状どおりに続くとすれば、第三次大戦が発生する可能性は充分にあります。いつ起こるかは今のところだれにもわかりません。戦争を起こすか起こさないかの選択権は常に世界の人間に与えられていますので——つまり人間が何を許容し、何を許容しないかの問題です。

もし戦争の脅威が人間の方へ接近し、核兵器によって地球上の生命の絶滅の恐怖を人間が抱くならば、自由世界や共産主義世界の大家が立ち上がった、戦うことに反対し、戦争になるのを防ぐでしょう。そうなれば大破局は避けられます。しかし第三次大戦が起こることになるといかに予言できるかということになるとこれは不可能です。したがってこんな予言をする人があれば、それはインチキです。戦争があるかないかについて、あら

かじめ予定された運命というものは存在しないからです。

人間の運命は自分の手の中に握られていますから、進歩にせよ破滅にせよ、これは全く人間の意志次第です。

問2 日本列島は将来海中に沈下するという噂がありますが、あなたはそう思いますか？

答 日本列島は、地球を自然に取り巻いている大ガスベルト（複数）の一つの上に位置しています。これらのガスベルト群は太平洋の外側一帯を走っています。これらは南アメリカからアメリカ合衆国の西部を突っ走り、アラスカに伸びています。更に海を渡り、日本を縦断してインドネシアに及んでいます。これは地殻を形成する巨大な七つの大陸棚の一つに相当するものですが、こうした大陸棚は地球が膨張するにつれて絶えず移動しています。地球は古くなるにつれて膨張し続けます。これは自然の過程です。いつか地球がある限界に達したとき、崩壊するでしょう。地球が膨張しているというシムシは、太陽系がきわめて古いという事実の証拠にはなりません。

地球が膨張するにつれて、大陸棚すなわちガスベルト群は分離し、その間隙が広がってゆきます。そしてどの程度に膨張しても、そのたびにプレートは移動し沈下します。こうした広域なプレートの移動が、いわゆる地震を生みさせるわけです。

したがって、あらゆるプレートが動き続けるというのは地球の自然の過程なのであって、これによりある地域は海中に

沈下するわけです。そして数千年間海で覆われていた土地はふたたび水面上に隆起するでしょう。これは自然の浄化作用で、部分的には地球の膨張に関係があります。北極と南極の移動もそうです。

そこで、日本列島のどこかが沈むかどうかの問題ですが、再度言いますと、これはだれにも正確には言えない一種の予言となりますが、日本が非常に多くの地震を体験するであろうことは、未来において確実になるでしょう。群小地震もあろうし、巨大なものもあるでしょう。これがいつ頃発生するかは、だれにも正確にはわかりませんが、自然の発生にすぎません。というのは、日本は二本の大陸ガスペルトの大交差点に位置しているからで、その結果、島々は膨張して海中に沈下するでしょう。

——科学者は最近このガスペルトを発見しましたか？

——一九六〇年の地球観測年の初頭に科学者（複数）はガスペルト群に気づきました。北極と南極を含むあらゆる大陸で研究が行われています。彼らは大陸棚ばかりでなく自然のガスペルトの多くを地図にしていますし、その動きや動く方向も予知できたのですが、いつ動くか、どれくらいの速さで動くか、といったことはまだわかりません。

問3 エジプトのカイロのピラミッドですが、あれは何のために作られたのですか。また、いつ頃、だれの手によって建造されましたか。

答 エジプトばかりではなくメキシコやその他の地域のピラミッドのすべては、

地球全体にわたるピラミッド・システムの一部です。その元の目的は惑星から惑星への航行用にされました。

ピラミッドの性質として、その内部で食物などを腐らないように保つことができるといわれていますが、これはピラミッドの形からくる磁気放射線の自然の曲折のためです。しかしピラミッドの本来の目的はこんな事ではなく、もっとはるかに大きなものでした。

エジプト人が最初にエジプトへ来たとき、ピラミッドはすでに長期間そこに建っていたのです。エジプトのピラミッドは極端に古いもので、エジプト人よりもはるか昔の文明の人間によって建造されたものです。

問4 チャクラと宇宙の意識との関係はどんなものですか。

答 古代の書物で述べられているチャクラというのは、肉体の七つの神経中枢を意味するにすぎません。新約聖書にはこれに関する多くの記事があります。七つの天、七つの門、七つの燭台など。特に黙示録にも同じ事柄が出ていますが、これは肉体の七つの基本的な神経中枢です。これら七つの神経中枢は脊椎の基部から頭のとっぺんにかけて位置します。これらは人体内のあらゆる神経のための中枢コンピュータまたは十字路と云ってよいでしょう。

私たちの言う「意識の英知」と神経中枢との関係ですが、これは意識のエネルギーが人体内に入るにつれて、それが七つの神経系統を通じて肉体のあらゆる細胞に伝達される、ということなのです。

したがって七つの神経中枢を互いに整頓強化させることが重要です。なぜなら、これがなされると人間は以前よりも意識による印象に対してはるかに大きな感受力を持つことになるからです。

問5 オーラについてはどうですか。特に人体から出るオーラの色についてどう思いますか。

答 オーラの問題はずいぶん論議されてきましたが、不幸にして心霊的な体験がオーラに関連づけられています。多くの神秘家は、ある種の神秘的な眼でもって人体を取り巻いている不思議な光を見ることにより、個人の過去や未来、現在の状態などを読み取ることができると称しています。

人体を取り巻くオーラすなわち光は、たしかに存在します。それはさほどの距離までは伸びず、人間ばかりではなく、あらゆる生物の周囲に少しばかり放射されています。せいぜい人体から六ないし七インチ程度で、大抵の場合は約四インチです。色はさまざまで、その強さは個人が現在用いているか消費しているエネルギーの量によります。

一個人のオーラは不変なものではありません。それは本人の気分や心の表現などにより常に変化します。感情やフィリングがオーラに影響を与えるのは次の理由によります。

オーラはあらゆる生き物から出る放射エネルギーにほかなりません。これは太陽にたとえることができます。黒いガラスかフィルターを手にして空を眺めると太陽は輝く球体に見え、放射線を出して

います。太陽の縁から出るように見えるこの放射線は、あらゆる生き物のオーラに非常によく似ていると言えるでしょう。知性が高ければ高いほど本人に用いられているエネルギーの量は大きくなり、高度な波動が人体から放射されるのです。こうしてオーラには種々の変化が生じます。

問6 人間の過去世（過去の生涯）を透視するにはどうすればよいのですか。その方法を教えてください。

答 これは長い話になります。あなたが今十倍の長さの録音テープを持っていたとしても十分に録音はできないでしょうが、どうすればやれるかの基本的な概念はお伝えできます。

個人の過去世の知識または記憶は私たちが自然な状態になればなるほど自動的にやってきます。ご存知のとおり、この世の多くの人々、特に東洋諸国の人々は生活の大半を伝統と因襲でもってすごしています。したがって人間は自然人というよりも、各世代を通じて伝えられる因襲と伝統の創造者になってしまったと言えます。

私たちは子供の頃から、お父さんやお祖父さんはこんな風に物事をやったのだと教えられます。だから同じ習慣や伝統を続けなければならぬと教えられるわけです。実際、私たちがやっている事は人間が作った習慣や人間の概念を支えることにすぎません。そうすることにによって私たちは非常に不自然な状態になってしまい、自分自身を自然から切り離してしまつたのです。過去世の記憶をも含む

人間の真自我の知識を持つためには、私たちはもっとはるかに自然の状態になり、もっとはるかにオープンになり、受容的になる必要があります。因襲、伝統、習慣、欲望、好き嫌いなどを除き、更に自分自身や自分の生活環境などに対するあらゆる意見をしりぞける必要があります。私たちが現世で学んできた、こうした重要でない事柄でもって、あまりにも自分自身を縛りつけています。そうすることによって、自然の表現にストップをかけているわけです。

このことは人間にとって重要な物事や生活の基本的な物事などに対する完全な再評価が必要だということになります。今まで人間は重要な物を創造してきましたが、今度は自然の創造物に返らねばなりません。

この概念をお伝えするには、自然界を見るのが最上です。幼児が生まれたときにそれを見るのです。乳幼児を観察してごらん下さい。大人が吹き込む多くの習慣や伝統を覚え込む前の彼らの姿を。彼らの自然の能力を調べてごらん下さい。曇りのない眼で彼らが人間や周囲の状況をどのように見るかを観察しなさい。そうすれば、自然の状態であれというところが何を意味するかが最もよくわかるでしょう。

人は何度も言います。「よし、これをやろう、あれをやろう」と。またある瞬間、私たちは次のようなフィリングを起こします。「そうだ、これは良い事だろうな。あれは楽しい事だろうな」。しかし続いて伝統や因襲というものが入り

込んで来て、次のように言います。「ただ、これこれの理由があるから、おれにはできっこないよ」とか、「これこれの理由で、おれは、やらないほうがいいんだ」

しかしこうした「理由」は重要ではありません。人間がそれを重要なものにしてしまっただけです。そして「重要なのだ」と教えられてきたのです。

以上の（自然の状態になる）過程はきわめて困難です。なぜなら人間個人がどれほどの年齢であるかによって、それに多年蓄積された習慣や習慣細胞を抜いているからです。当然、この習慣細胞は破壊されねばなりません。そして元通りの状態になるには長年月を要するでしょう。

生活上の難問題は人間の概念による生き方から生じるもので、創造主の概念ではないという事実に気づき始めると、より良い進歩とこの問題の理解に対する正しい道に足を乗せたこととなります。

過去世の記憶のようなものは、自然の源泉としてわき起こるでしょう。人間は自分自身や他人の過去世に関する情報の蒐集を始めたときに、自分自身に執着しないほうがよいと思います。まず自分の家（肉体）の中をきちんと整理しておくべきで、そうすれば過去は自分の所へ返って来て、未来のために役立つでしょう。

問7 人間のセックス（性）には多くの謎があると思います。これについて詳細に説明して下さいませんか。また、フリーセックスというのは罪悪ですか。

答 まず最初に、セックスまたは性欲というものは、人間の生命力だということを確認する必要があります。それは宇宙の最大の力ですし、各人間を通じて現れている意識でもあります。だからこの問題についてこれほど多くの混乱があるので。各人は自分にはわからないほどに何度も性的なフィリングによって生活が促進されます。「わからない」という理由は、人間が自分のマインド（心）を意識から分離させており、そのためにいつもアンバランスな状態にあるからです。人間は一極端か別な極端な方向にむかっています。世の中には、性行為というものは肉体的なもので、聖なるものではないからという理由で、毛嫌いな人がいますけれども、すでに述べましたように、人間の性は英知の源泉なのです。それは個人の意識です。

フリーセックス、または結婚しないで行われるセックスの問題は、はるかに異なる角度から追求されるべきです。それは多くの異なる条件、多くの異なる見地から試みるべき話題です。

しかし安全に言えることがあります。それは宇宙の法則はただ一つの事だけを要求するというだけで、つまり各人に責任があるということ、各人は自分の行為を尊重しなければならぬということ、そして、たとえば、二人の男女が互いにあるフィリングを持ってしていると、しかも結婚はしていないとします。彼らは自分の自然のフィリングに従うべきですが、しかし二人が常に忘れてならないのは二人とも自分の行い行為、特にセッ

クスの分野の行為に対して責任を持たねばならないということ。これは肉体的な体験ばかりではありません。私たちがセックスの問題を扱っているときは、自分を支えている生命力そのものを扱っているのです。

性欲の誤用は肉体を破壊し、病気にしたり、早老化させたりしますが、これは肉体を支えている生命力を悪用するか誤用しているからです。そのために肉体的老化や病気などの徴候が出てくるのにさほど長い時間はかかりません。

しかも、もし二人の男女が出会い、自然のフィリングを起こし、それに従い、その結果、性的関係にまで行った場合、二人は常に互いを尊敬し合わなくてはなりません。その尊敬感や意識の意図による行為に従事することによって起こるものです。

また当事者が忘れてならないのは、あらゆる性的行為は肉体をはるかに超えたものであるということです。それは意識によるものでもありません。もし性行為の結果、子供が産まれるという事態にでもなれば、両親となるべき男女は自分の責任を認識する必要があります。決して逃げようとしてはいけません。ところが、男が逃げ出す例が非常に多いのです。女性が妊娠すると男は簡単に去って行き、女は取り残されて子供を養育しなければなりません。これは宇宙の法則に反することです。子供は両親を必要とするからです。もし男が女に接近して、そのために性的関係にまでゆくならば、男は相手の女性をいわば創造の母として尊敬する

以要があります。

問8 あなたは宇宙の意識は人体の太陽神経叢の中にあると言っておられますが、これをもっと詳しくお話し下さい。

答(ステックリング氏) 人間の体は七つの中枢神経を持っています。そのうちの四つはマインド(心)の一部分で、想像力の源泉です。七つの神経中枢は脊推を垂直に降下し、太陽神経叢を形成しますが、意識的なフィードバックのほとんどは太陽神経叢の部分で感受されます。太陽神経叢の上部を私たちは共通部分または人間の有限部分と呼んでいます。人間の再生個所である下部は宇宙的な部分です。したがって人間の知性が心、脳または頭の中に存在するというのは誤った考え方です。人間の真の英知ある部分は太陽神経叢の中か下にあるのです。または人体の下部すなわち人間の再生部分の中にあります。言い替えば、私たちが性器と呼んでいる部分です。この性器の中に最大の英知が存在するというのは大抵の人に信じて信じ難いことでしょう。

人間の英知は心や脳の中にあり、あらゆる物事はこの脳を用いて達成されると教えられてきましたが、これは私たちにそのように見える表面的な結果にすぎません。人間は多くの物を建造したりデザインしたりしますので、心を用いますしかし心を知性と名付けています。しかし心を創造し、心を支えている源泉のものをぞぎ込むことはできません。その源泉こそ自然の力であり、自然の英知なのであって、これを私たちは宇宙の意識と呼んでいます。

この宇宙の意識は神と呼ばれてもよいものですが、これは自らを無数の波動に分割しています。その波動のいずれも全宇宙内の万物をつらぬいており、人間や植物や動物などに差別を語りかけることはしません。

人間がほとんど関心を払わないこの宇宙の英知は、あらゆる生命体の創造主です。もっと理解しやすく平易に言いますと、たとえば人間は出かけて樹木を切り倒し、材木にした上で家具や家などを作ります。人間が知的生物と呼ばれるのはこの樹木のように自然の材料を用いて多くの物を作るからなのですが、しかし人間は生きて樹木を創造することは不可能だということまで考える力のある人は少数です。しかも樹木を植えてそれを養うのに、人間ほどに大きな英知を持つものはありません。このことで原因となる特殊な英知が宇宙の意識です。この宇宙の意識は太陽系、全惑星、衛星、惑星上の人間を含むあらゆる生命体を作り上げています。

この英知は人間の再生の原因ともなっています。言い替えば、女性が子供を妊むとき、それは宇宙の意識を通じて行われ、胎児は生まれ、人体が形成され、この世に生まれ出ますが、これについて人間の心の助けを借りるわけではありません。食物を食べて体内で消化される場合もやはり人間の心を用いるのではなく、宇宙の英知の助けによって行われます。肉体が疲労して回復を要する場合、これも宇宙の意識の指令によって回復するのであって、心によるものではありません。

心は大体に人間に属するものであるからです。

この惑星地球に住む人間は、自然界のこうして、いわゆる自動的な作用について気づいていませんし、それに対してほとんど注意を払いません。この諸作用が地球上の万物を生成させるための原因となる英知そのものです。

したがって、人間のなかの最大の人物でも常に自然から出発する必要があるので、彼らは自然界へ出かけて行って、人間自身や心よりも自然のほうがはるかに英知のある領域であるということを知ります。このことはもう理解できるでしょう。

言い替えば、人間の体、心などが存在する以前に意識が存在したのです。そしてその意識が肉体や心の創造を行うのです。

ですから実際にはそれは「父」または万物の創造主です。この生命力は再生部分と呼ばれる人間の太陽神経叢の下にあり、したがってこれは宇宙的な部分ですが、一方人間の脳は心であって、人間の片割れ部分ともいべきセンスマインドです。それは人間の死とともに滅します。人間が死ぬとき、その太陽神経叢の上部は肉体とともに地中へ埋められますが生き続けて人間を形成し続けるのは太陽神経叢の下に存在する人間の魂です。

———こんな知識をどこで仕入れたのですか？

———これには二つの要素があります。この知識はもとスペース・ブラザーズからアダムスキー氏に伝えられたもので、ア

ダムスキー氏は一九六五年に死ぬ前に、私に話してくれました。(以下次号)

久保田八郎訳

編者注II これに続く次号の質問は次のとおりである。重要な内容が公開されるのでご期待頂きたい。

「転生について。人間は過去の記憶を持っていてる筈ですが、肉体が死んで焼かれた後に、どのようにして記憶を持ち運ぶのですか」

「地球上の動物はすべて別な惑星から運ばれたのですか。有史以前の太古に巨大な動物がいましたが、これらも他の惑星から運ばれたのですか、それとも自然に発生したのですか」

「ムー大陸とアトランティス大陸について説明して下さい。どのようにして破滅したのですか。それとも自然に海中へ沈んだのですか」

「この太陽系は破滅期に入っていると云われており、別な惑星群の人々は他の太陽系へ移動しているということですが、地球上の多数の人もその太陽系へつれて行かれていますか」

「イエスは金星から地球へ転生した人ですが、ブッダについてはどうですか。やはり他の惑星から来たのですか」

「テレパシー能力の開発について、最も重要な練習方法がありますが、他国に比べては自衛隊がいますが、他国に比べては自衛隊が持っていますか。日本はもっと強力な軍を持っていますか。核爆弾を持つことについてはどうでしょう」

その他。

日本GAP各地 行事報告と予告

80年8月以降分

▼日本GAP海外研修旅行第二回

アメリカ南米宇宙 考古学の旅

去る八月十四日より二十六日まで日本GAPは恒例の海外研修旅行第二回目として「アメリカ南米宇宙考古学の旅」を実施し、六十三名の大部隊はアメリカ、カリフォルニア州を皮切りに南米ペルーとボリビアのインカ遺跡視察の大旅行を終え全員無事に帰国した。詳細は本誌四頁より掲載の「大アンデスと太陽の帝国へ」と参加者の内十数氏による手記を参照されたい。



● 8月14日、米カリフォルニア州ビスタにおける日米合同夕食会

▼第三回 熊本支部大会

- 十月十九日午後一時より六時まで。
- 市みゆき会館
- 会費二〇〇〇円

講演「アダムスキー問題の本質」

日本GAP会長 久保田八郎

● スライド「アメリカGAP本部研修の旅」映写。大会終了後、希望者による夕食会を開催。主催者は津野田俊行氏と首藤秀利氏。

以上の要領で詳細案内状を九月下旬に九州地方の全会員に発送済。

▼山形支部 イモ煮会

山形市伝統のイモ煮会を今年も十月二十九日(日)に同市内にて支部主催で行うことになった。これは江戸時代から続いた行事で、河原に石を積んでカマドを築き、ナベをかけてサトイモ、野菜、牛肉などを煮込んでその場で賞味するという素晴らしい野外パーティーである。仙台支部も合同で参加する予定につき盛会となる模様。県外からの参加希望者は山形支部代表・山口緑氏宛照会されたい。

〒九九〇山形市東原町四一七一―一八朝日荘23号。勤務先電話 現代学習セミナー 〇二三六―四四一〇六七〇

▼今年度日本GAP総会

別掲予告どおり今年度日本GAP総会が十一月九日(日)都内皇居真裏半蔵門の東條会館大ホールで開催されるので会

員各位多数のご出席をお願いする次第である。出場五氏と編者の大講演、大阪支部からの応援司会、今夏の海外研修旅行の迫力ある8ミリ記録映画、夜の記念大パーティー等、盛大な大会が予想される。

▼松山支部大会

来年(一九八一年)三月二十二日(日)に松山支部主催の第二回大会が一年ぶりに同市松山全日空ホテルで開催されることになった。詳細は次号に掲載の予定。

▼おめでた

● 去る九月三十日、千葉県館山市の会員鈴木一宏氏と近藤富子さんがめでたく千葉共済会館で結婚式と披露宴を挙行さ

れ、編者を含む十数名の会員がご招待にあずかった。ご多幸をお祈りする次第。

▼ハルオ宮内氏の個展

日本GAPの有力会員でニューヨークで八年間イラストレーターとして大活躍されたハルオ宮内氏(現在は米国籍)の「ニューヨークファンタジー」と題する個展が東京有楽町のソニービルで九月中旬から約一カ月間開催され、大反響裡に終了した。

引き続き十月十日から二週間、「オー・ザット・ニューヨーク」と題する同氏の個展が池袋の西武デパート八階のアトリエ「ヌーボー」で開催される予定。会員諸氏のご観賞をお願いする次第。

英語を母国語同様にする! ひとり言で マスター英会話 できる

久保田八郎/アン・デイカス

全国書店で絶賛発売中

■英語の語感を身につけて母国語同様にするには、英語で考える習慣を身につけねばならぬ。英語で考えるためには、自分自身の日常の行動に際して、英語でひとり言をつぶやくに限る。これこそ英語を自分のコトバにする魔術的な方法である——という著者久保田八郎は多年の研究と実験の結果、ついに秘法を公開した! これこそ他に全く類のないユニークな学習書であり、これにより、読者はおそろきに英語を口から出すようになって狂喜し、〈英語で考えることのできる世界〉を作り上げて、英語圏内に住む一人となるのだ!

■本書の主体をなす第1部では、丸の内の大貿易会社につとめる混血の青年ユキオ・ブラウン君の春の一日がストーリーとして展開し、その間たえずユキオが英語でひとり言をつぶやくながら行動する。読者も一人のユキオになって、日常生活で彼と同じ英語をつぶやくばよい。そのようにして「慣れる」のだ。第2部は英語のひとり言の重要なきまり文句集。第3部は外人にものを頼むときの模範的会話集。第4部は英語の文語体と口語体の相違を豊富な例文により解説。冒頭の「発音上の注意」や全巻にわたる脚注と共に、一般に知られていない意外な事実を多数渡らしている。

B6変型判・159頁・厚手上質紙使用
¥720 千120 (日本GAPでは取扱いません)

主婦の友社 〒101 東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL. (03)294-1111(大代表) 振替・東京2-180

＜創立20周年記念＞

日本GAP総会開催

——記念大講演会と映画上映——

会員の皆様にはご健勝のことと存じます。さて今年も下記の要領で今年度総会を開催することになりました。創立20周年を記念して久保田八郎と共に俊英5氏による大講演が行われますので万障お繰合せの上多数ご来場のほどお願い申し上げます。

日時 11月9日(日) 午前10:00→午後5:00

会場 東條会館1階大ホール

東京都千代田区麴町1-4 TEL. 03-265-5111 (大代表)

●地下鉄「有楽町線」の「麴町駅」下車、徒歩5分。便利なコース＝国電中央線に乗り「市ヶ谷駅」で下車。同駅ホームの地下鉄「有楽町線」乗り場から銀座方面行きに乗車し、隣の「麴町駅」で下車、「半蔵門」出口へ。または国電中央線「四谷駅」下車、「麴町」出口へ出てタクシーで約¥500。

会費 ¥2,000 当日受付でご納入下さい。

——プログラム——

司会 平塚 和義 (大阪支部代表)
渡辺優美子 (大阪支部)

- | | | |
|-------|-----------------------|-----------------|
| 9:00 | 受付開始 | |
| 10:00 | 講演「宇宙的生活の基本」 | 伊藤 達夫 (松山支部代表) |
| | 〃 「生活の中のアダムスキー哲学」 | 笠原 弘可 (仙台支部代表) |
| | 〃 「実践24時間」 | 野口 敏治 (静岡支部代表) |
| 12:00 | ——休憩・昼食—— | |
| 13:00 | 講演「アダムスキー哲学と私の歩み」 | 遠藤 昭則 (東京本部) |
| | 〃 「宇宙哲学との出会いと実践活動の今後」 | 志田 真人 (東京本部) |
| | 〃 「アダムスキー問題の本質」 | 久保田八郎 (日本GAP会長) |
| 15:00 | 映画「アメリカ南米宇宙考古学の旅」 | 浜村建郎/菊地喜之 |
| 12:00 | 司会者閉会の辞 | |

★記念大パーティー 立食形式パーティーを同会館別室にて開催します。
会費¥6,000/時間は18:00より20:30まで。★参加希望者は10月末までに〒133東京都江戸川区本一色町365-818, 日本GAP宛ハガキでお申込み下さい。

★東京都内に宿泊希望の方へ

8日夜または9日夜、東京都内へ宿泊希望の方は下記へ早目にお申込下さい。安いホテルをお世話します。宿泊日と1人部屋か2人部屋の区別を明記して下さい。

〒155 東京都渋谷区東3-24-9 サンイーストビル2F

ワールドセブントラベル社, 田中正 TEL. 03-499-2461

主要訪問地紹介

■**ロサンゼルス** 米カリフォルニア州の州都で人口 300 万。アメリカ第 2 の大都市で美しい町です。気候が温暖で住みやすく、日系人も沢山いて、リトル・トーキョーという日本人町もあります。東洋方面からの表玄関といえる航空路線の重要基点です。

■**パロマー天文台** ロサンゼルス南東 150km のパロマー山頂、標高 2,000m の台地に 1948 年 6 月に建設された、当時世界最大の 200 インチ反射望遠鏡を設置した天文台。紺碧の空に高さ 60m の純白の大ドームが美しく浮か上がっています。ドーム内で望遠鏡を参観します。

■**パロマーガーデンズ** 1950 年代頃にアダムスキーが俗界を離れて門弟たちと共に約 10 年間住んだ場所で、パロマー山の山頂付近にあり、現在はキャンプグラウンドになっていますが、高弟のアリス・ウェルズ夫人が経営したレストラン跡やアダムスキーが自ら建てた木造の木小屋は記念物として保存してあります。

■**アメリカ G A P 本部** カリフォルニア州南部のビスタ市にあるアメリカ G A P 本部（正式にはジョージ・アダムスキー財団）は、かつてジョージ・アダムスキーが住んでいた場所で、現在も建物は残っており、高弟のマーサ・ウルリッヒさん、フレッド・ステックリング夫妻、スティーブ・ホワイティング氏らが活動の本拠としています。アダムスキーの寝室や遺品類も保存されています。ビスタ市には 2 泊して 2 日目は本部で質疑応答会を行い、夜は日米合同の大夕食会を立食形式で開催します。

■**デザートセンター** カリフォルニア州南部のモハービ大砂漠の一部で、1952 年 11 月 20 日、アダムスキーが 6 名の目撃者と共に、着陸した円盤から降り立った金星人と会見した場所として有名になりました。詳細はア氏の著書「空飛ぶ円盤は着陸した」に述べてあります。

■**グランドキャニオン** アリゾナ州北部にある雄大な大峡谷で、長さ約 350km、幅約 20km のカコウ岩、ケツ岩、石灰岩などの岩層が奇怪な形をなしてつらなり、大景観を呈しています。近くのフラグスタッフ市へ 1 泊して、峡谷の南側リムから遊覧電車で見学します。このあとロサンゼルスに 1 泊の予定です。(希望者のみの旅行で、追加料金を要します)

■**メキシコ市** 「太陽と情熱の国」メキシコの首都で人口では世界有数の大都市です。かつてはアステカ帝国の首都でしたが、16 世紀にスペイン人コルテスに征服されてからスペイン風の植民都市に変ぼうしました。往時の栄光とインディオの土俗的雰囲気とが混交して独特なエキゾティシズム(異国情緒)に満ちています。ここに 3 泊して市内及びローカル色豊かな近郊を見学し、陽気なマリアッチの民族音楽に陶酔しながら夕食会を開きます。

■**テオティワカンの大遺跡** メキシコ市の北東 50km にある古代の大宗教都市。謎の民族により 2,000 年前頃太陽と月の二大ピラミッドが建設され、その間を「死者の大通り」が貫き、多数の神殿跡も残っています。「太陽のピラミッド」は高さ 60m の壮大なものです。

■**バレンケの遺跡** マヤ古典期の至宝ともいふべき「碑銘の神殿」ピラミッド、「宮殿」「太陽の神殿」その他の素晴らしい遺跡が残っていますが、特に「碑銘の神殿」ピラミッドの地下には名高い浮彫を施した石棺があります。ジャングル中の幻想の世界といえるでしょう。

■**ウシュマルの遺跡** 美しい町メリダに 1 泊後、南方 80 km の所に位置する古典期末期のブーク様式のウシュマルへ行きます。特に「魔法使いのピラミッド」の偉容、優美な「尼僧院」「総督の館」の大建造物その他に圧倒されます。

■**チチェンイツァの遺跡** メリダから 120 km の広漠たる大草原中に残るマヤ後古典期文化の最大の遺跡で、カスティージョ(城)と呼ばれる壮麗な大ピラミッド、「戦士の神殿」ピラミッド、「球戯場」天文台といわれる「カラコル」、いけにえが投げ込まれた「聖なる泉」その他が見学者を魅了します。

★以上、メキシコ、ユカタン半島の古代マヤの各遺跡を一度見たら最後、その妖しい神秘的な魅力にとりつかれて何度も行きたくくなります。ここにはムー大陸の宇宙思想を源泉とする宇宙的な雰囲気とただよっているのです。アダムスキーもかつてユカタン半島の宇宙関係遺跡探検を計画したことがあります。

■**カンクン** ユカタン半島北端のカリブ海に面した美しい海岸町で、ここに 2 泊してゆっくり休養します。青緑色の澄んだ海、信じられぬほどキメのこまかい純白の砂浜、灼熱の太陽——。日本人がほとんど行かない、俗化されぬこの素晴らしい保養地で 1 日、心ゆくまで海水浴を楽しんでください。

■**ディズニーランド** あまりにも有名なこの巨大な施設はカリフォルニア州アナハイムにあり、ロサンゼルスへ帰って見学します。特に夜の「光の大パレード」が圧巻で、これも見ます。詳細はニューズレター第 70 号 16~17 頁を参照してください。(希望者のみの旅行で追加料金を要します)

★今度の旅行は全体的にゆったりとした愉快的な旅です。思いきり異国の風物に堪能し、いつまでも胸に残る懐かしい思い出に満ちた日々となるように久保田も田中も精一杯の努力をしますから、日本人団体の海外旅行としては最高に素晴らしい「宇宙への旅路」となるでしょう。





第3回日本GAP海外研修旅行



アメリカメキシコ宇宙考古学の旅

■日本GAPは海外研修として1979年より毎夏海外旅行を実施し、いづれも大成功裡に帰国しましたが、1981年8月も下記の要領でアメリカ西部とメキシコの古代マヤの遺跡見学の旅を行うことになりました。■例年と異なって今回はアダムスキーゆかりの地たるカリフォルニア州ピスタに2泊して半日は米GAP本部で質疑応答会を開き、パロマー天文台はもちろん、アリゾナ州の世界的大景勝地グランドキャニオンを見学し、メキシコではメキシコ市に3泊するほか有名な古代マヤの遺跡4カ所を視察したあと、ユカタン半島北端の美しい海岸町カンクンのエメラルドグリーン色に輝くカリブ海で海水浴に打ち興じてロサンゼルスへ帰り、最後は夢の国ディズニーランドで終日楽しむというリラックスした素晴らしい旅が実現します。■名コンビの久保田八郎と旅のベテラン田中正が豊富な経験を生かして企画した手作りの旅行は日本GAP独特なもので費用・内容とも他社の追隨を許しません。多数ご参加の上、生涯忘れ得ぬ思い出を残して下さい。

G.アダムスキーの大地と雄大な米西部へ！ 謎の古代マヤの遺跡と美しいカリブ海へ！



- 定員 65名
- 期間 昭和56年 8月15日→29日
- 費用 ¥558,000(航空運賃、朝食付ホテル代、団体バス運賃、その他の費用を含む。★24回払い可能(毎月約¥26,000払い))
- 主要見学地 右頁を参照
- 案内書 千133 東京都江戸川区本一色町365-818
- 申込先 日本GAP (140円切手同封のこと)
- 旅行団長 日本GAP会長 久保田八郎
- 添乗員 ワールドセプトラベル社 田中正
- 企画 日本GAP
- 主催 トラベル日本
- 協力 アメリカGAP本部
- 取扱代理店 ワールドセプトラベル株式会社

※この旅行は日本GAP会員を主体にしたものですが、会員でない方も参加できます。知人等にお誘い合わせの上、多数ご参加下さい。

日本GAP

年月日	曜日	場所	時間	交通機関	備 考
1981年 8月15日	土	成田発 ロサンゼルス着 ロサンゼルス発	午後 午後 午前	航空機 専用バス	一路、ロサンゼルスへ 着後市内見学 夜は渡米懇親パーティー(会員自己紹介) (ロサンゼルス泊)
2	8月16日	ロサンゼルス着 ピスタ着	午前 午後	専用バス	パロマーガーデンズ、パロマー天文台視察 ピスタ着後ホテルへ (ピスタ泊)
3	8月17日	ピスタ滞			午前：自由行動 午後：米GAP本部にて旅行参加者との質疑応答会 夜：日米合同夕食(立食形式) (ピスタ泊)
4	8月18日	ピスタ発 デザートセンター ロサンゼルス着	午前 夜	専用バス	アダムスキーと金星人との会見地デザートセンターを 視察 (ロサンゼルス泊)
5	8月19日	ロサンゼルス滞			終日自由行動 (希望者はアリゾナ州の雄大な大峡谷グランドキャニオンへ小旅行) (ロサンゼルス泊)
6	8月20日	ロサンゼルス発 メキシコシティ着	午前 午後	航空機	メキシコシティ一帯後市内見学 夜はレストランにてマリアッチの民族音楽を聴きながら 夕食 (メキシコシティ泊)
7	8月21日	メキシコシティ滞			終日：テオティワ坎ンの壮大な遺跡視察 (メキシコシティ泊)
8	8月22日	メキシコシティ滞			終日自由行動 (希望者は国立人類学博物館見学か近郊のオプショナルツアーがあります) (メキシコシティ泊)
9	8月23日	メキシコシティ発 ピリヤエルモサ着	午前 午前	航空機	ピリヤエルモサ着後マヤ文明遺跡の中でも最も重要な 宗教都市であるパレンクの遺跡を見学 (ピリヤエルモサ泊)
10	8月24日	ピリヤエルモサ着 メリダ着	夜 夜	航空機	マヤとトルテカの混合文明、チチュエイツァの遺跡を 見学 (メリダ泊)
11	8月25日	メリダ発 カンクン着	午前 午後	専用バス 又は 航空機	マヤ古典期後期の爛熟した文化の姿を伝えるウシュマ ルの遺跡を見学 (カンクン泊)
12	8月26日	カンクン滞			終日自由行動(美しいカリブ海の保養地カンクンで終 日楽しんで下さい)夜は、さよならパーティーを開催 の予定 (カンクン泊)
13	8月27日	カンクン発 ロサンゼルス着	午前 午前	航空機	ロサンゼルス着後自由行動 希望者はディズニーランドへ (ロサンゼルス泊)
14	8月28日	ロサンゼルス発	午後	航空機	一路帰国の途に (機内泊)
15	8月29日	成田着	夕方		成田空港着後、自由解散

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:00 ※11月は〇のた め月例会を中止 ※来年1月のみは 第2土曜日の10日 に月例会を開催	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車、改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから4階へ行く。	¥ 300	テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」を持参。2:00→3:00「テレパシー」講義、3:00→3:30久保田会長の近況報告、テレパシー練習、休憩。4:30→6:00自己紹介、研究発表、質疑応答。 ※来年1月は月例会終了後新年会を開催。会費¥2,500
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話(388)7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先=平塚和義 ☎06-436-3478 子安達雄 ☎06-719-7228	300	テキストとして「テレパシー」（文久書林刊）「生命の科学」を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 月は21	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先=足立亘宏 ☎0252-62-0968	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田会長の「テレパシー」講義録音テープを公開。テレパシー練習、座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	熊本市桜町「熊本市市民会館」会議室。 ☎(55)5235 連絡先=首藤秀利 〒860 熊本市黒髪2-28-9 藤川方 ☎0963-43-1525（午後9時まで）	200	テキストとして「生命の科学」と「テレパシー」（文久書林刊）」を持参。久保田会長の東京例会における「テレパシー」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
岐阜支部	毎月第2日曜日 午後1:30→4:30 ※〇月のみ第4日 曜日に変更。11月 は東京総会のため 中止	岐阜市神田町「商工会議所」☎64-2131 国鉄または名鉄「岐阜駅」下車、徒歩10分、バスか市電で「柳ヶ瀬」下車、近鉄百貨店を北へすぐ近く。 連絡先=間嶋泰行 ☎0582-71-0069 林 国宜 ☎0586-45-6468	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先=笠原弘可 ☎0222-95-0725	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレパシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※11月は東京総会 のため中止	山形市民会館。小会議室。山形市香澄町山形駅より徒歩5分。☎0236-42-3121 連絡先=山口 緑 山形市東原町4-17-18朝日荘23号 ☎0236-44-0670（勤務先・12:00より夜9:00まで）	200	テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレパシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※10月は19日(日) 午前9:00→12:00 12月は14日(日)午後	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011-241-9171 連絡先=伊藤重信 ☎011-251-4331	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会、テレパシー練習、自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	静岡市、婦人会館 連絡先=野口敏治 ☎0542-86-7729 ※来年1月のみ浜名湖館山寺荘で出張月例会を開催の予定。詳細は野口宛照会のこと。	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第3土曜日 午後6:00→9:00	旭川市四条通り10丁目右1号「北海道新聞旭川支社」会議室。電話0166-23-2111 連絡先=石川公一 ☎0166-51-5699	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:30	松山市民会館会議室 連絡先=伊藤達夫 ☎0898-22-3060 (電話は夜間のみ8:00以降)	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。質疑応答、座談会。

★本誌バックナンバー(旧号)★

米GAP本部公認の唯一の日本支部たる日本GAPアダ
ムスキー問題に関して正確詳細なインフォメーション
を伝える本誌は貴重な資料として後世に残るものです。

No.68 主要記事「UFO問題の真相(最終回)」G.アダ
ムスキー／〈アメリカ中米宇宙考古学の旅〉紀行「転
生と追憶の砂漠へ」久保田八郎／「回想の
アメリカ中米旅行」——思い出を語る人々／
「質疑応答(1)」ステイーブ・ホワイティング／その他。

No.69 主要記事「アダムスキー問題と宇宙開発」
キース・フリットクロフト／「ヨーロッパの
UFO事情、ベルギーGAPの活動とアダ
ムスキーの思い出」メイ・フリットクロフト／
「總會を終えて」久保田八郎／「オーラと
過去世の透視」／「質疑応答」(2)ステ
イーブ・ホワイティング(3)／その他

No.70 主要記事「創造主のハート」G.アダムスキー／
「愛と太陽の大地」久保田八郎／「コンピ
ューターによるUFO写真の真偽判定は
正しいか」田畑宏／「質疑応答」S.ホワイ
ティング／〈写真〉「東京上空のUFO」その他

各 ¥500 円200

—日本GAP—

振替・東京4-35912
(久保田八郎個人名義)

①「テレパシー」解説講義と(1時間半)

②「質疑応答」の録音テープ(1時間半)

今年度東京月例会における久保田先生の毎月の「テレ
パシー」各課の解説講義録音テープ。①は真意を理解
し、思想の統一を図る上で貴重な資料となるものです。
先生の雄大な弁舌は聴く人の心をふるい立たせます。
「近況報告」(30分)付き。テープ②は月例会での質疑応
答の録音で、先生の明快な回答や珍しい話を聞くこと
ができます。

テープ① ¥1000 円140

テープ② ¥1000 円140

2本注文の場合、送料は200円です。

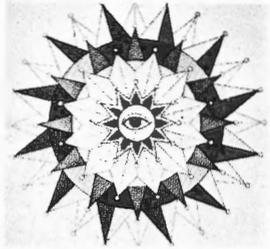
*これらのテープに限り、×月分と記して必ず下記
へご注文下さい。(本年1月より毎月1課ずつ録音)

〒274 千葉県船橋市前原西8-5-18

〈東京月例会司会者〉 浜村建郎 Tel.0474-65-1844



①



②

①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠で
アダムスキーが劇的な最初のコンタクトを
した金星人は「宇宙からの訪問者」第2部で
オーソンという名で出てくるが、これをア
氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチに
もとづいて女流画家ガイ・ベッツが描いた
名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある
眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識を
あらわし、周囲の四層の星は人間のマイン
ド(心)の発達状態をあらわしている。(サー
ビス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの
一体化を図る上で重要な資料となるもの
です。他所では入手できません。ご注文
は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

① ¥500 円100 ② ¥200 円50 —括注文の場合 ¥100

編集後記

★爽秋の候、会員の皆様にはご健勝のこと
と存じます。ご支援により71号の刊行をみて慶
びしく思っています。

★去る八月は予定どおり「アメリカ南米宇宙
考古学の旅」を実施し、全員無事帰国しまし
た。全国会員諸兄弟のご声援に感謝します。
本号はその特集として編者の紀行と参加者十
数氏の手記を掲載しました。紙面の都合によ
り次号まわしになった分もありますが、これ
らの記事により単なる物見遊山でない海外旅
行の意義をご察頂ければ幸いです。来夏も
別掲広告の如く参加回海外研修旅行を実施し
ますので多数ご参加下さい。

★十一月九日(日)の総会も切迫しました。
この予告はすでにハガキで全国の会員各位に
通知済みですから、内容についてはご存知のこ
とだと思います。これまた多数の方々のご来場
をお待ちしております。今回は外部からの招
待をやめて日本GAP独自のプログラムを組
みました。後英五氏の講演ははずれも素晴らしい
実践談ばかりですから皆様方に絶大な刺
激となるでしょう。今夏のアメリカ南米旅行
の8ミリ映画の迫力ある画面が現地同録のサ
ウンド付きで美しい民族音楽とともに展開し
ます。ご期待下さい。

★本号中で最高次の記事は編者のアメリカG
AP本部研修で行った質疑応答の完訳「宇宙
と人間の真相」です。他の如何なる書物から
も得られない宇宙的なインフォメーションに
満ちています。次号で完結しますので引き続き
ご購入下さいは幸いです。

★編者宛のご質問も結構ですが、超多忙のた
め長文の返事は不可能ですから、各質問のあ
いだにスペースを設けて書いて下されば、そ
こへ「はい」、「いいえ」程度の簡単な回答を
赤字で記入して返送します。返信用切手を必
ず同封して下さい。

★本号の表紙写真は帰国後かなり日数が経過
してから入手したもので、撮影時にはだれも
気付かなかった物体ですが、UFO写真とし
ては白眉です。こうした場合、撮影者は被写
体たる人物に視線を注いでいますから、やは
り気付かぬのが普通でしょう。
★早いもので今年度日本GAPは創立以来二

十年目にあたります。その間編者の身に無数
の出来事があり、目まぐるしい日々が過ぎ去
って、世の大勢も一変しました。UFO問題
も熱病のようなブームが消え果てた昨今、少
少のUFO写真は大抵の人は驚きませんが、
やはり重大な意味を帯びています。今一度こ
うした写真に注目しようではありませんか。
★来年こそは本会にとって飛躍の年にするべ
く種々画策中ですが、なんともいって先立つ
ものが必要ですから、次の告知に対して何ら
かのご援助をたまわれ幸いです。

お願

日本GAPはジョージ・アダムスキー氏
の高次な宇宙哲学と宇宙問題の普及促進に
邁進してまいりましたが、諸物価高騰のた
め資金難におちいり、運営が困難になりま
した。出費多端な折から恐縮ですが、わが
国唯一の米GAP公認アダムスキー研究グ
ループたる本会の維持を支援なく継続でき
るように応分のご寄付をたまわれ幸いに
存じます。

★送金の際は必ず郵便振替を利用し、「日
本GAP維持基金」と明記して下さい。

★従来編者(久保田八郎)は「主宰」という肩
書きを用いてきましたが、九月より「会長」
と変更しましたからご了承下さい。これは責
任の所在を明確にするためです。
★東京月例会は九月第一土曜日に変更し
ましたが、来年度一月のみは第二土曜日の十
日に行いますからお間違ひなきようお願いし
ます。

GAPニューズレター 71号

編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP

〒133 東京都江戸川区本町365-818

電話(651)0958

振替東京4-35912(久保田八郎名義)

Oct. 20 1980 頒価500円送料200円

